
棺のクロエ1.3 機神狩り

義忠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

棺のクロエ１・３ 機神狩り

【Nコード】

N 8 6 9 8 W

【作者名】

義忠

【あらすじ】

辺境の空を飛ぶジャイロ機の機長グエンの下に、ヤクザ者のファンが訪れた。兵隊崩れの重武装の手下たちと大量の武器を乗せて飛べと彼は命じる。すべてはたったひとりの男を殺すために――
マシーナリイ・ファンタジー
辺境の大地に繰り広げられる機械幻想の外伝！

0（前書き）

ご無沙汰しております。

いろいろ宿題を抱えている身ですが、とりあえずこの夏の新刊『棺のクロエ』の最新外伝をお届けします。

今回はちよつとハードボイルド調で、登場人物はオーバー30のおっさんばかりですがw、その辺の需要もどこにはあるのではないのか、と。

まあ、これ以外にも『棺のクロエ』の外伝はあるのですが、その辺はおいおいと。

ではどうぞお楽しみください。

『……よりロックバード。現在位置はどこだ？』

「こちらロックバード、クラバ涸川^{ワジ}を越えた辺りだ。到着予定時刻は一五分後」

『急いでくれ。患者の出血が激しい』

「何とか持たせろ。医者と一緒に輸血パックも積んできた。無駄足踏ませるんじゃないぞ！」

言い終えると、グエン・ヴァン・トゥアンは操縦席^{コックピット}から背後の客室^{キャビン}を振り返って怒鳴った。

「先生！ 患者の容態がヤバイらしい。現場からの通信を今そっちに廻す。応急処置の指示をしてやってくれ！」

『判った！』

機内を満たす爆音に負けじと、ヘッドセットを押さえながら壮年の医師が叫ぶ。

それをヘッドセットのスピーカー越しに耳にしながら、通信の切り替えボタンを叩いて、外部通話を機内通話の回路に接続する。

事故を起こして重傷の患者を抱えた鉱山現場と、医師の切迫した会話を聞き流しながら、周囲の状況と計器類を素早くチェックする。問題ない。じっくりと確認したわけではないが、飛行に影響の出そうな違和感を感じられない。

機体上部の双発エンジンも順調だ。エンジン音にも機体を震わす振動のリズムにも、計器の示す回転数や温度にも異常はない。おかげで機内通話なしでは、隣のシートに座る副操縦士と話もできない。大戦中も戦場を飛び廻っていた軍払い下げのこの老嬢は、今日もお意気軒高でけたたましい。

ちなみに、こうしている今現在、この機の操縦桿は副操縦士が握っている。二〇歳を出たばかりの地元で雇った若者で、操縦桿を任せるのはこれで二度目だ。正規の訓練は受けていない。グエンが手

ずから、飛行に必要なこと仕込んでいる最中だった。いずれ中原^{ハートランド}にある正規の飛行学校に送り込んでやらねばならない。とりあえず今は、現場度胸を付けさせるため操縦桿を握らせている。

まだ緊張が解けないのか、肩に力が入り気味なのが見て取れた。だが、涸川^{ワジ}沿いにまっすぐ飛ばすだけなので、特に心配はいらないだろう。

グエンは改めて機外に目をやった。渴ききつて醜い地肌をさらす涸川^{ワジ}とその兩岸の急峻な斜面が急速に後方へと流れてゆく。わずかに残った水分にしがみつこうように、まばらに草や痩せた木々が生えていた。色みらしい成分はそれくらいで、後は色の抜けた薄茶色の乾いた大地が続いている。

ぱっと見、対地高度はそれほど高くはない。手を伸ばせば届きそうな高さ。ちよつとでも操縦を誤れば、すぐにでも大地に激突しそうな近さだ。既に標高が高く、大気も薄いため、双発エンジンを積んだこの機体でも、あまり対地高度は高く取れない。薄い大気を圧縮してエンジンに送り込む高圧過給器^{スーパーチャージャー}などを積んでいないということもあるが、そもそも機体上部の回転翼^{ローター}を回転させ、大気を掻き廻して浮力を得るジャイロ機にとって、高高度飛行は苦手な領域なのだ。せめて地表近くの比較的濃い大気を求めて、地を這うように飛ばざるを得ない。

だが長年の経験から、この程度の対地高度であれば多少のトラブルがあつてもどうにかなると、グエンは踏んでいた。突風やエンジン不調などのトラブルが発生しても、この高度なら対処の時間はある。それで稼げるのはほんの十数秒程度の時間だが、もっと低い高度で、目の前で対空砲の近接信管に炸裂されたことだってあるのだ。勿論、戦時中の話だが。あの時だって何とかなったのだから、どうにもしようはあるだろう——そう、ふてぶてしく肚^{はら}で嘔^うく。

つまり、すべて順調。問題なし。
ノイプロブレム

『機長、涸川^{ワジ}が終わります』

「了解」

副操縦士に操縦桿を預けるのは、涸川^{ワジ}が終わるまでという約束だった。ここからしばらくは、より複雑な地形の溪谷地帯に入る。それを抜ければ、目標である露天掘りの鉱山が見えてくるはずだ。

「操縦桿をこちらに渡せ」

コ・ハブ・コントロール

『操縦を渡します』

アイ・ハブ・コントロール

「操縦を受け取った」

サイクリック・スティック

正面に掴む操縦桿がぐつと重みを増す。右手は出力桿^{コレクティブ・レバー}に沿え、じわりとスロットルを開く。

機体がぐつと浮かび上がり、尾根をひとつ越える。

「……………」

毎度のことながら、この瞬間だけはあまりいい気分はしない。

戦時中、兵隊と武器を詰め込めるだけ詰め込んで、こうした溪谷地帯に送り込むのがグエンの日課だった。電波警戒機^{レーダー}を警戒して高度は取れない。元より積載オーバー気味の機体にそんな能力はない。稜線と溪谷の隙間を縫うようにして這い進み、尾根をひとつひとつ越えて、敵の後方へと忍び込む。だが、こちらの手の内は敵も先刻承知だ。うかつに飛び込んだ谷間には、鋼鉄の阻塞ワイヤーが張られて、引つかかったらそこで終わり。そこを抜けたら、地面が爆発してるんじゃないかと思うくらいの濃密な対空砲火。色とりどりに輝く曳光弾が、アイスクャンデーのような尾を引いて、自分めがけて一斉に突っ込んでくる。事前の砲爆撃であらかた片付いていと豪語していた参謀の戯言^{たわごと}が、事実だったためしはない。

重い機体を左右に振り廻してそれを避ける。直撃を回避しても、>同盟くの対空砲弾は弾頭が機体に近づくだけで炸裂する近接信管付きだ。機体のあちこちに砲弾の破片が当たって、カンカンと耳障りな音を立てる。

隣機が直撃を喰らって火だるまになる。昨夜、カードで貸しを作ったばかりの同僚が生きながらに焼き尽くされんとする断末魔が、ヘッドセット越しに流れ込む。ああ、畜生。これで貸した金を回収しそこなった。それ以上は考えない。戦友の死を悼むのは、自分が

生きて帰ってからだ。目の前の操縦にだけ集中する。

そうこうする内に、びびった客室キャビンの新兵が小銃ライフルの引き金を引く。

畜生、畜生、畜生。お客さん、静かにしてくれ。さもないと、どいつもこいつもこの場で全部放り出すぞ——！

『機長……？』

「……大丈夫だ」

何事もなかったかのようにグエンは告げ、出力桿コレクティブ・レバーを押し込んで更に機体を上昇させる。

時折訪れる一瞬のフラッシュバック。首筋に重い汗が吹き出して、インナー下着が肌に張り付くのが判る。それを副操縦士に気取られぬよう、いつもどおりの態度を装って操縦に専念する。

終わった話だ。もう五年も前に戦争は終わっている。鉄と砂で血を灌そそぐような凄惨な戦場だったこの>帝国<西方辺境領北部山岳地帯の空も、今では対空砲火もない、阻塞ワイヤーもない、平和な日常の空へと戻ったのだ。自分も軍の任務ではなく、民間会社のいち操縦士パイロットとして操縦桿を握っている。

それは言祝ことほぐべきことだ。こうやって平和な空を飛んで、若者の育つ姿に目を細め、地上に降りれば整備と事務処理に追い廻されながら日々を過ごし、ゆるやかに老いてゆくことに感謝をすべきだ。そうできなかった戦友たちのためにも。

……それなのに、何故、自分は未だにあんな悪夢を振り払うことができないのだろう。

それは平和な「この空」と血塗れの「あの空」が、どうしても地続きの「同じ空」であるような思いを、拭い去ることができないからだ。

それが何故なのか自分でも判らない。戦場への郷愁か、死んだ戦友への贖罪の意識か。

判っているのは、多分自分は一生、この感覚と付き合い続けるのだろうという、確信めいた感覚だけだ。

それをどう折り合いつけるかというひとつの回答が、グエンにと

つての今の自分であり、この仕事だった。

心拍がいつもの勤務時の水準に戻るのが判る。もう大丈夫だ。尾根をもうひとつたつ越えれば、目的地もすぐに見えてくるだろう。普段から資材の運搬や今日のような急病人の搬送で何度も飛んだルートだから、どのタイミングで何が見えてくるかまで、ばっちり頭の中に叩き込まれている。

と、その見慣れているはずの視界に、かすかな違和感があった。

——人間……？

前方——グエンがこれから越える尾根の上に、ひとりの男が立っていた。遠くからなのであまりよく見えないが、ジーンズに大戦中には空軍兵が好んで着ていたようなボマージャケット。この時期の標高では、気温を考えるとあまりお勧めできない出で立ちだ。やや痩せぎすに見えるのは長身なためか。真っ白に色の抜けた長い髪が目の前を被っていて、浅黒い肌の表情は読み取れない。山歩きの装備の類も見当たらず、ただ尾根の上でひとりで佇^{たたず}んでいるようだった。

だが視線はまっすぐに、こちらを見ている——そう感じた次の瞬間には、機体は男の頭上を航過していた。

振り返って男の姿を確認したい衝動に一瞬駆られたが、すぐに抑え込む。何の必然性もない。ましてや、戻って確認などできようはずもない。この先で重症の患者が待っているのだ。

グエンは気持ちを切り替えて、男の存在を思考から追い出した。現在時刻を確認し、残燃料やエンジン状況を再度チェック。現地に到着後の機材や人員の搬入搬出の手順について、事前の打ち合わせ内容を副操縦士に読み上げさせる。

現地に到着すれば、即座に患者を搬入して離陸だ。エンジンも回転翼も止めない。慌ただしく、しかし安全には細心の注意を払う必要がある。それだけに、飛行時より更に神経の集中が必要だ。

だから、この話はこれでおしまいだ。

グエン自身はそう、思っていた。

0（後書き）

え、本編中「ジャイロ機」という表現を使用していますが、こちらの世界での「ヘリコプター」と同等のものだと思ってください。「辺境でやさぐれたパイロットをしている主人公が、トラブルに巻き込まれる」というのは、もう冒険小説としてはベタベタのネタなんです、是非、そのベタさ加減をお楽しみください。

あまり一般には理解されないのだが、大抵の航空機は飛んでいる時間より地上で整備している時間の方が長い。

本来、飛ぶはずもない鉄とジュラルミンの塊を強引に空に浮かべているのだから、相応の無理が機体やエンジンに掛かる。具体的には、熱と振動。それが溜まりに溜まって、放置しているとエンジンが焼き付き、機体そのものにも応力負荷が加わって、ある日、ここがぽつきりということになりかねない。

そういった諸々の無理をどうにか誤魔化し、緩んだ器具を締め直し、消耗した部品やオイルを交換し、次の飛行に耐えられる状況に持ってゆくのが整備の仕事だ。

グエンが社長兼操縦士パイロットを務めるティエンソン航空でもその事情は変わらず、社保有の唯一の機体であるこの双発ジャイロ機の機付整備長の役職も、彼自らがありがたくも務めていた。勿論、彼が兼ねているのはこれだけでなく、事務局長から職員の教育係まで、すべてが彼の仕事だった。つまり、社長ひとり、社員ひとり、たまに事務の手伝いに役所から派遣されるオバサン職員がひとりというのが、ティエンソン航空の全職員だった。

そんなわけで、本社機能のある申し訳程度の広さの空港——垂直離着陸のできるジャイロ機用の猫の額ほどの離着陸パッドを、グエンはそう言い張っている——そばに建てられた整備用の格納庫で、エンジンの熱が冷めるやいなや、アクセスパネルを開いて、グエンは機体状況を確認し始めた。

帰りの飛行の最中から、エンジン音に交じる微かな異音と振動異常に気付いていた。原因がどこかも当たりはつけていたので、まずその手当てに取り掛かる。

「冷めた」と言っても、程度の問題でしかない。素手で触れれば火傷は免れない熱さで、分厚い耐熱手袋は欠かせない。

大きな脚立の上に立って作業に熱中している内に、格納庫に誰が入ってきたことに気付いた。たぶんさつき倉庫から部品を取ってくるよう頼んだ、副操縦士のデインだろう。

「どうだ？ 頼んだ部品は倉庫にあったか？」

「やあ、精が出るな、大将！」

「……………」

よく通る大きな男の声。どこか飄^{ひょう}げたニュアンスを含んではいたが、ある種のはつたりとしてこうした声を出すことに慣れているような、芝居がかった印象も感じられた。

振り返ると、サングラスの小柄な男がこちらを見上げて笑みを浮かべている。歳の頃はグエンと同じ三〇前後といったところか。襟元にファアの付いた皮のジャケットを着込み、両腕をポケットに突っこんでいる。

ふてぶてしい面構えといかにも高価そうなそのジャケットで、この辺の鉱^{たぐい}区で一山当てようと目論む山師の類かと当たりをつける。あの連中なら、事前の予約もなしに、いきなり格納庫に押しかけるくらいの無礼をやらかしても不思議じゃない。

それでも一応、名前ぐらいは確認すべきかと、グエンは訊ねた。

「どちら様ですか……………」

「あんたが社長さんかい？」

グエンの問いを無視して、男は逆に訊ねた。

「……………そうですが。それで、そちらは一体……………」

「この機をチャーターしたいんだがね」

またしてもこちらの問いを無視して、勝手な要求をかぶせてくる。グエンは軽い頭痛を覚えて眉間を揉んだ。埒^{うち}が明かない。グエンは整備用の脚立から地上に降りた。

「あんた……………」

「金ならあるぜ。現金でも持ってきてきちゃいるが、足りないなら口座を指定してくれば、後で振り込ませる」

「そんなことを訊いてるんじゃない！」 苛立ちを隠さずにグエンは

告げた。

「あんた、誰だって訊いてるんだ！」

その怒声に、男は一瞬、驚いたように黙ると、やがてサングラスを外し、ややたれ目の瞳に人懐っこい笑みを浮かべて、右手を差し出した。

「いやあ、すまんすまん。どうも気が急いじまってね。俺の名はフアン・フィン——ハートランド中原で経営コンサルティングを手掛けてる」

「……グエン・ヴァン・トゥアンだ。ここで社長と操縦士パイロットをやってる」

「よろしくな、社長！」

半ばうんざり気味に差し出されたグエンの手を馴れ馴れしく掴んで、フアンは激しく振った。そこから振り払うような印象にならないように気を使いながら、グエンは手を引いて訊ねた。

「それで、何の用でウチに来たんだ？」

「さつきも言っただろ。この機をチャーターしたい」

「目的は？」

「ハンティング
狩りさ」

「ハンティング
狩り」……？」

グエンは眉根を寄せた。何を言っているのだ、この男は……？

「そう。この辺はでかい獲物があるっていうからな。狩猟好きの取引先の社長さん方ご一行で、そいつを仕留めに行こうって算段さ」

「……いつの話をしてるんだ？」グエンは呆れたように言った。

「そんな獲物ものはいない。戦前のまだ自然のあつた頃ならともかく、今のこの辺りに狩猟の標的になるような大型動物なんかいるものか」

大陸を二分する超大国である>帝国<と>同盟<の高度に機械化された軍隊が、真正面から激突した先の大戦の末期に主戦場となつたこの辺りは、野山を覆う大自然もあらかた破壊し尽くされていた。滴るような緑に包まれた森林地帯は、重機と砲爆撃で掘り返され、陣地構築の資材にするのだと伐採された。終いには「敵に隠れられると困る」という、その存在自体が悪であるかのような理由で、積

極的に焼夷弾で焼き払われ、焼け跡から二度と木々が芽吹かないようにと枯葉剤まで撒かれた。

そうした彼我双方の「努力」の結果として、この西方辺境領は砂と岩ばかりの荒野と成り果てた。自然環境も激変し、残るのは僅かばかりの草木と、そこに生息する小動物ばかりだ。狩猟の獲物になるような大型動物など、どこを探してもいるはずもない。

「まあ、それならそれでいいさ」ファンは肩をすくめて言った。

「だったら遊覧飛行つてことでも構わない。せつかくここまで出張つてきて、手ぶらでお帰り願うわけにもいかんのでね」

グエンはつれなく首を振った。

「……生憎だが、飛び込みの仕事は受けていない」

「何だい、そりゃあ？」

「ウチの会社は、この辺の自治体と鉾山会社が共同で金を出し合つて設立された会社でね。地元の需要が最優先。こうしている合間にも、いつ何時、事故や病人の搬送で呼び出されるか判らない。一見さんの客は紹介状持参で、数日前に飛行計画をあちこちに送つて了解を得なけりやならない」

「……面倒くせえ話だな。あんたが社長なんだから、多少は融通効かせられねえのかい？」

「雇われ社長にそんな権限はないさ。わざわざ出張ってくれたのに無駄足で返すのも何だから、市長には俺からも話を通してやる。そこから先は、そっちの才覚次第だ。そこで紹介状貰つて出直してくれ」

「それじゃあ、困るんだ。それじゃあな……」

グエンではなく、背後の機体を見上げるようにファンは告げる。吊られるようにその視線を追いかけたグエンをよそに、いつの間にかファンの右手には黒い自動拳銃が握られていた。

「金が駄目なら、こういうのはどうだい？」

銃口をこちらに向けながら、ファンは愉しげに言った。

「何のつもりだ……？」

グエンは銃口の動きを慎重に追いながら言った。飛び掛かって銃を奪うことも考えたが、たぶんこの距離では難しい。自分には当たらなくとも、機体や格納庫内の可燃物に当たるのは避けたい。まずは向こうの出方を静観するしかない。

「落ち着いてるねえ。お宅も戦場帰りだったっけな。それなりの修羅場は踏んでるか」

戦場を飛ぶジャイロ機の機長に積み荷の兵隊との揉め事は日常茶飯事だ。勿論、銃口を向けられていい気分にはならないが、怯えてパニックする自分は自動的に切り離され、冷静に対処法を探ろうとする思考が動き出す。戦場帰りがどうこうという以前に、パイロットとは元々そういう人種なのだ。

「>帝国<空軍第1168戦術輸送飛行団山岳ジャイロ飛行隊所属、グエン・ヴァン・トゥアン少尉——いや、終戦間際の温情昇進で中尉で除隊だったか？ 整備兵の下士官上りとしちゃあ、上等な出世じゃないか。」

おまけに>帝国<銀騎士十字章を始めとした、飾るのに困るほどの勲章。資料を見る限り、出撃回数も対地撃破数も大したものだ。どうやったら輸送ジャイロで戦車を潰せるのか、今度教えてくれるか？」

「……………」

こちらのプロフィールはとくに調査済みらしい。何者だ、こいつ？ 勿論、「経営コンサルタント」なんかでないのは、拳銃を抜いた時点で明らかだ。だが、何で自分の戦歴なぞ知っているのか。別に自伝を書いて出版した記憶もない。記録の残ってる軍に繋がりのある人間だろうか。

「これだけの戦歴上げてりゃ、戦後も軍に残るなり、実家に戻っても勤め先は引く手あまただったろうに。あんた、こんな辺境（とろろ）で何をやってるんだ？」

「……余計なお世話だ」

「それもそうか」

ファンは軽く肩をすくめ、本題に戻った。

「この機体を借りたい」

「……何に使うつもりだ？」

別に知りたくもなかったが、時間稼ぎのために訊ねる。その場で拒絶してもよかったが、取引が成立しないと判断したら躊躇わず引き金を引きかねない剣呑な雰囲気、にやついた表情のファンにはあった。

「言つたろ。狩りに行くのさ」
ハンティング

「わざわざこんなでかい機体を使つてか？ 近所にもっと小廻りの効く小型機を持つてる会社もあつたはずだ」

「知ってる。こいつでなくちゃ困る。だから、こうしてあんたの前に立つてる」

ディンはどうした？ そろそろ山ほどの部品を抱えて、あの若い副操縦士が格納庫に顔を出す頃合いだ。彼を捲き込むのは心苦しいが、それで一瞬でも奴の注意が逸れれば——いや、それにしても遅すぎないか？

「……………」

こいつひとりではない、ということか。大人数、あるいは双発ジヤイロ機が必要なくらいの装備を抱えている。ディンはそいつらに捕まったと考えるべきだろう。……。

急速に険しさを増すグエンの表情を眺めながら、ファンは気楽な口調で言った。

「河岸を変えよう。ここは火気厳禁なんだったよな。そろそろ煙草が恋しくなつた」

1（後書き）

そんなわけで、前章の顔見世に続いて、主人公がトラブルに捲き込まれる回。

順調にハードボイルドのお約束展開を消化していますね。

次回もグエンとファンと駆け引きは続きます。

更新は来週9月25日（日）の予定です。
ではまた。

「社長！」

「大丈夫だ。俺に任せておけ」

泣きそうな声を上げるデインに、グエンは務めて落ち着いた声で告げた。と言って、何か目処があるわけでもない。気休めには違いないが、それを口にするのも大人の務めではある。

ファンに急ぎ立てられるように格納庫横の事務所に辿り着くと、自動小銃で武装した屈強な男たちに囲まれて、デインが真っ青な表情で椅子に縛りつけられていた。男たちの人数は三人。ひとり髪が生え際が大きく後退してはいるものの、肌の色つやを見る限りグエンやファンとほぼ同年代。残りはまだ若い腕や脚のどちらかが機械化された機人^{マシーナリイ}だった。

おそらくは、いずれも兵隊崩れ——構えている銃の持ち方に無駄はなく、張り詰めたような余計な緊張感もなかった。こちらがおかしな動きを見せれば躊躇なく引き金を引くだろうが、うっかり引き金を引くようなミスも犯しそうもなかった。

戦時中にならば場数を踏み、戦後もそれなりに継続して修羅場に身を置いてきた連中、と言ったところか。

しかも、これで全員とは限らない。

その辺のチンピラ機族の方がまだ扱い易かったが、贅沢の言える身分ではない。

さて、こいつらにどうお引き取り願うか、だが……。

「まあ、突っ立ってないで座れよ、社長」

内心で呻くグエンの胸中を知ってか知らずか、ファンは勝手に奥の応接シートにどっかと腰を下ろすと、拳銃を振って座るように促す。

「……………」

グエンは黙ってファンと向き合う形で、シートに腰を下ろした。

ファンは拳銃をこれ見よがしにテーブルの上に置き、胸ポケットからシガレットケースを取り出してタバコを口に咥える。手を伸ばせば奪えなくもない距離。勿論、実際にやれば、即座に他の男たちから蜂の巣にされるだろう。それが判つて、あえて拳銃から手を放したのだ。

ファンは余裕があるのをこれ見よがしに示すように、軍用オイルライターでタバコに火をつける。戦時中、前線の兵士達に配給された「糞を吸う方がマシ」と言われた銘柄。今時、こんなものをわざわざ吸う奴がいるのか。そのタバコの紫煙をさも美味そうに大きく肺に吸い込む。

「やっと人心地がつけたぜ。」

——さて、改めてビジネスの話といこうじゃないか」

「……あんたら、何者なんだ？」

顔に掛かる紫煙に眉を顰めながら、グエンは訊いた。

「そうだな。改めて自己紹介をしておくべきだな。」

俺の名はファン・フィン、さっき名乗った通りだ。戦争中はあんな等のお得意さんだった」

「……空間機動歩兵……？」

一〇〇二〇人強の少人数の歩兵と、携行^{RPG}ロケット砲のような小型の対装甲火器類、そして場合によっては軍用ヴィーグル一台ないしは軍用バイク数台で構成された一箇分隊を、ジャイロ機で敵前線の後方に送り込み、前線後方を攪乱、あるいは兵站線を寸断する>帝国<陸軍の殴り込み部隊——それが空間機動歩兵だった。

もっとも、その勇ましい任務と名前の割に、生還率は著しく低かった。

敵地に潜入しての最初の一撃まではいい。だが、攻撃に成功すれば、その時点で所在が露呈する。大した火力も機動力もない以上、後はほうほうの体で敵地を逃げ廻ることしかできない。そして得て

して前線を突破できずに包囲殲滅されて終わり。

しかも、敵もバカではないので学習する。前線を突破するジャイロ機を待ち受け、阻塞ワイヤーや対空火器で出迎える。それを突破して何とか地上に降りた兵士たちを、十字砲火が待ち受ける。

それでもそんな作戦が続けられたのは、末期の>帝国<軍西方辺境領北部戦線には、まともな装甲兵力が存在しなかったからだ。当時、>同盟<側の戦略的詐術によって装甲兵力のほとんどを南方戦線に抽出してしまった彼らには、取り残された山岳歩兵達と、導入直後で実用性を疑問視されつつ部隊集中運用の試験という名目で中央から押し付けられた大型ジャイロ機部隊のふたつくらいしか、まともな兵力は残っていなかったのだ。

絶望的なまでの巨大な物量と、火力の差。山を砕き、またた瞬く間に山脈をぶち抜いて高規格の軍用道路を開通する圧倒的な工作能力。

そうした巨大な>同盟<軍戦力に抗って、わずかなりと>帝国<軍側の戦力再編のための時間を稼ぐ捨石として、彼らは使われたのだった。

だから、特別にそのための訓練や研究を経て成立した部隊ではない。移動の足を失った歩兵をジャイロ機に押し込んで、後はなるようになれと無理やり出撃させたのが実態だった。しかもろくに生きて帰ってこないのだから、戦訓の蓄積も、戦術の洗練もない。前線の兵士たちの間で、自殺の代名詞として扱われたのも致し方ない面があった。

だが、結果だけを見れば、その犠牲は報われたと言っているだけだ。

北部戦線を突破して中原に雪崩込もうとした寸前に、>同盟<軍集団本隊は>帝国<軍が全土から必死に掻き集めた機甲軍集団によって捕捉された。そして後世の研究者から「神話」とまで称される数千台の戦車の入り乱れた大戦車戦の末、総司令官自身による「ハートランド我が軍は中原への突入衝力を失った」という宣言とともに、>同盟<軍の車列は祖国へと引き返して行ったのである。

その意味で、彼らは>帝国<を救ったと言っても過言ではない――
―そうした史家の評価は、未だに一般に定着しているとは言い難い。
多くの戦場帰りの若者たちと一緒に、彼らもまた社会から「喰
い詰めた厄介者」扱いを受けていた。

その現実を受け入れて生きる者もいれば、そうでない者もいる。

戦後、「自分は空間機動歩兵だった」と名乗って愚連隊を組織し、
あちこちで暴れている連中がいるとグエンも耳にしたことがあった。
してみると、こいつらもその内のひとつか。

もつとも、それを聞いたからと言って、グエンに特に感慨はなかつた。
こちらにも生きるのに必死だったのだ。彼とても、世の中から
すれば戦争帰りの無力な若者にすぎなかった。戦時中の任務で多生
の縁ができたからといって、他人の人生にとやかく口を差し挟める
ほど、お上品な人生を送っている自覚もなかった。

そのことをもって、ファンの方でもどうこうと拘こたわるつもりもない
らしい。

ファンはさらりと話を続けた。

「勿論、経営コンサルタントなんかじゃない。ドウツクルンでー。

○人ほどの手下てかを従えた組を構えている」

ドウツクルンは中原と西方辺境領の境にある都市の名前だ。元々、
ハートランド

>帝国<の西方開拓の拠点であり、交通の要衝として発展してきた。
鉄道のターミナル駅や高速道路が集中し、輸送飛行船の停泊所ステーションも早
くから整備されてきた。

それがこの前の戦争では前線を支える巨大な物流拠点としてより
一層、交通物流能力を増強され、一時は>帝都<に次ぐ人口五〇〇
万に迫る一大物流都市と化した。

戦後、軍関連の需要がごっそり減り、西方辺境領の開発事業も一
時停滞する中、遺棄された軍需物資や兵器、職を失った将兵などが
流れ込み、一気に治安が悪化した。

今では事実上、地下社会に支配された都市として知られる。

もつとも、グエンもここに来る前に、一年ほどドウツクルンで暮らしていたことがある。旅費がそこで尽きたのだ。飲食店の皿洗いや倉庫の荷運びなどの仕事で日銭を稼ぐ内に、ジャイロ機のパイロットを募集する今の仕事にありついた。その時の印象では、巷間、言われるほど治安が酷いわけではない——昼間の間は、ではあるが他所ではともかく、ドウツクルンで一〇〇人ほどの規模の組織と例えば、ようやく中堅どころに手が掛かるつか、といったクラスの組織だ。戦争帰りの兵隊崩れであることを考えると、「新興の」という形容詞が頭についてもおかしくはない。

だが、そのヤクザが何の用で、こんな辺鄙な場所まで出張^でってきたのか……？

その疑念を読んだかのように、ファンは続ける。

「ドウツクルンでは、軍隊時代のツテもあって、武器から酒から女まで、手広く扱っててな。手向かう奴らもばつちりぶつ叩いて、よろしく愉しく過ごしていたんだが、ある日、昔の知り合いが訪ねてきて、全部ご破算になっちまった。それが、こいつだ」

ファンは胸元から一枚の写真を取り出して見せた。

「こいつは……？」

思わず写真を手に取る。長い白髪に浅黒い肌の若い男の横顔。雑踏の中を走る姿を、離れた場所から撮影したもの。だが、そこに映る男は、あの山中で見かけた青年とそっくりだった。

「……どこで見かけたことがある、って面だな？」

グエンの動揺をファンは目ざとく気づき、瞳を細めた。

「どこで見かけた？」

「知らん」

テーブルの上に写真を放り出し、グエンはそつけなく答える。

「まあ、いいさ」ファンはそれ以上、追及しなかった。

「こいつの行先は判ってる」

「……何をしでかしたんだ、こいつは？」

グエンは話題を変えるように逆に訊ねた。

「俺の手下^{てか}を殺し、女房子供を殺し、『親』の呼んだ客まで殺してくれた」

「『親』……？」

「上の組織さ。ヤクザにだっていろいろしがらみってものがあつてな。まあ、そんなわけで、俺がこいつの首を持って帰らないと、組織は俺の首をその客筋に差し出すことになる」

話す内容は剣呑^{きわ}窮まりない割に、フアン^{きわ}の口調はどこか他人ごとのようにも聞こえた。自分の女房子供を殺された口^{くち}にしながら、そこにさほど拘り^{こたわ}もないようだった。

「何者なんだ、こいつは？」

「ザン・セオ・キエム——ガキの頃からつるんでた幼馴染さ」

「それが何で……？」

「さあな、恨まれてるからじゃねえのかな」

「恨まれてる？」

訊ねた返すグエンにフアンは素っ気なく答えた。

「戦争中に弾薬庫ごと吹っ飛ばした」

「な……っ？」

「こいつは、俺がやってた武器や燃料の横流しを上層部^{うえ}に密告^さしやがつてな。師団の兵站司令部から員数調査に将校が来るってんで、その前に弾薬庫を吹っ飛ばした。丸ごと吹っ飛ばしちまえば、武器や弾薬の数が少々、帳簿と合わなくなっただけで気にする奴はいねえ。ついでに、たまたまこいつもそこに居合わせちまった。それだけのことさ」

「……………」

絶句するグエンに、フアンはどうでもいいことのように付け加える。

「そうそう。あと、あいつの女を俺のものにしたってのもあつたっけな。あいつに殺された俺の女房^{めかけ}ってのは、元々こいつの女房でね。そりゃあ、八つ裂きに仕^したって飽きたらねえだろうよ」

うつすらと笑みさえ浮かべながら語るファンの口調に、グエンはぞつとした。まともじゃない。それがこのザンという男の所為なのか、端^{はな}からそうだったのかは知らない。俺の知ったことじゃない。こんなぶつ壊れた男とは関わりを持つべきではないと、グエンの脳内警報が金切り声を上げていた。

だが、そう感じたからといって、この場がどうなるというものでもない。

グエンは声にならない呻きを呑み込んで言った。

「……それで、この男を狩るのに繰り出した兵隊運ぶのに、ウチの機体が必要だつて言いたいのか」

「まあ、そんなところだ」

「無理だ」グエンは素っ気なく否定した。

「そうかね？ 社長であるあんたの裁量次第だと思うが」

「そういうことじゃない」グエンは首を振って説明する。

^{フライトプラン}「飛行計画を当局に出していない」

「別に気にする必要はないさ」

「そんなわけにいくか！ 戦争が終わったといっても、ここは国境近くの土地だ。＞同盟＜からの領空侵犯も、それに対する空軍の緊急^ス発進も、日常茶飯事なんだ。飛行計画も出さずにジャイロ機がふらふら飛んでたら、速攻で空軍に撃墜されちまう」

「急病人が出たとも言えはい。あんた、今日も医者を載せて飛んでたじゃないか。ああいうのにも飛行計画^{フライトプラン}つてのは、必要なかね」

「……急ぎの場合は略式で済むが、役場に確認の問い合わせがいく。ちよつとでも不審に思われたら、それで終わりだ」

「面倒な話だな」

鼻で笑うようにファンが告げる。

「だから——！」

「気にする必要はない、と言ったろう？ ヴー！ 地図を持って来い！」

先ほどの三人の男たちの内のひとり、髪の薄い男が航空地図をフアンに手渡す。

ファンは地図をテーブルの上に広げた。山岳地帯を縫い走るように、飛行ルートと思しき赤い線が引かれている。

「何だ、これは……？」

「このルートを飛んでくれば、お咎めなしだ」

「は……？」何を言ってる——

「そういう話に、なってるんだよ」

「……………」

密輸ルートだ。ようやく理解できた。＞帝国＜南方で採れる麻薬を精製し、＞同盟＜領内に運び込む。ジャイロ機を使って、西部辺境領北部山岳地帯越しに密輸する。それに軍が関与しているという噂は以前からあった。さもなければ、警戒厳重な国境地帯の空をやすやすと飛行できるはずがない。

軍特務機関による＞同盟＜ディスタビリイズ・オペレーション圏への不安定化工作——に名を借りた、汚い裏金稼ぎ。軍の特務機関は、議会にもマスコミにも、なろうことなら自分たちの上司にさえ知られることなく好きに使える金に飢えている。戦後、＞帝国＜ディスタビリイズ・オペレーション圏内でも＞同盟＜産の合成麻薬が蔓延し始めている。＞同盟＜側の不安定化工作というだけでない。おそらくは国境の向こう側でも、同じような闇の力学が作用し、両者の融合による合成獣キメラのような麻薬ビジネスが育ちつつある。

この飛行ルートは、この国境地帯に絡みつく腐った闇のビジネスの副産物といったところだろう。

「このルートは明日には閉ざされる。だから今日の内に飛んでもらわなきゃならない」

「……ふざけるな！」

グエンは吐き捨てた。

「ふざけちゃいないさ。それなりの金もあちこちに撒いて、ようやく手に入れたルートだ。ま、こっちは自分の命も掛ってるんでね。なりふり構ってられないのさ」

「貴様らのような下衆げすどものおかげで、地元の人間がどれだけ迷惑してるか——！」

「ご高説はいずれ伺おう。その内、暇が出来たらな。で、飛んでくれるのか、くれないのか——」

「断る」グエンはファンに皆まで言わせず、拒絶した。

真っ向から怯むことなく睨むグエンの表情をしばし眺めたファンは、「そうか」と素っ気なく頷くと、テーブルの上の拳銃を手に取りと立ち上がった。その一瞬、垣間見えたファンの両目の酷薄さに、グエンの背筋に怖気が走る。

「おい、待て！ 貴様、何を——！」

慌てて立ち上がるうとするグエンを、いつの間にか背後に廻ったヴーがシートにお圧さえ込む。

「止める！」

叫ぶグエンをよそに、乾いた銃声が、小さな事務所に鳴った。

苦痛に押し潰された若者の絶叫。血と無煙火薬コルダイトが入り混じった、特有の匂いが鼻につく。

ヴーが手を放すと同時に、グエンはシートから飛び出した。事務所の床の上に、椅子に縛られたままデインが転がっている。

真っ赤な血だまりが、床に広がっている。動脈を断たれたのか、出血が激しい。右の太ももから血を吹き出させて、デインが床の上で苦痛にのた打ち廻っている。

「何してくれてんだ、手前っ！」

グエンはその場に立つファンの胸ぐらを掴む。

「落ち着けよ、社長」

「こんなことされて、落ち着いてられるか！」

激昂するグエンの顎に、ファンはまだ熱を帯びた銃口を押し付ける。

「……………な……………っ！」

「落ち着こうぜ、社長。あんたがルールを勘違いしているようだ
たから、これで仕切り直しだ」

「勘違い……ルール、だと？」

「そうさ。ビジネスのルール。俺とあんたの間のビジネス」

「……………」

ぴたりと顎に張り付けられた銃口に^お圧されるように、ゲンはゆ
っくりとファンの身体から手を離す。

「いいか、社長。俺は今回、ここにジャイロ機パイロットの操縦士と整備士を
連れてきてる。俺はこういうことで手抜きはしない。それで戦争
も、戦後の稼業も生き抜いてきた。だから、あんたんとこの小僧を
この場で殺し、あんたも殺して、機体を奪ってもさほど問題はない」
「……だったら、何でこんなことを……？」

喘ぐように問うゲエンに、ファンは悪戯っぽく口許を歪める。無
論、両目はつめたく冷え込んだまま。

「そこさ、社長。俺とあんたのビジネスが成立する余地は、そこか
ら先にある」

何が言いたいのか。理解できずに眉を顰めるゲエンに、ファンは
続ける。

「俺が連れてきた操縦士は中原出身で、この辺の空に慣れちやいな
い。機体の癖も判ってない。荒れやすい山岳地帯の空でそいつは無
視するには大きなリスクだが、最悪諦めきれないリスクでもない」

「つまり——」

「そうだ。その範囲内でのみ、俺とあんたのビジネスは成立し得る。
そういうことだ」

「……機体だけ、勝手にもってゆけばいいだろう」

「いい提案だ。だが駄目だ。俺たちの存在を通報されて、途中で空
軍に撃墜されるのは、まったくもって楽しくない」

「通報なんかしない」

「そういう些末なリスクは、事前にきちんと潰しておく主義でね」
「無線を壊せばいい」

「勿論、そうさせてもらう。だが、誰かがここに通りかかったら？ そいつが無線機を持っていて、当局に通報したら。そして、そこに俺たちがどこへ向かったのかを喋る口があったら？ これも楽しいない想像だが、あり得ない話じゃない。こいつも潰すべきリスクだな。そうじゃないか、社長？」

まるで契約書の穴を肅々と潰す法務担当のように、ファンはグエンの退路をひとつつつ潰してゆく。

「さて、社長。経営者としての、あんたの判断を訊きたい」

「……デインに……彼に、治療を——」

グエンは掠れる声で告げた。ファンは冷ややかに突き放す。

「まずは本契約がまとまってからだな、その話は」

「くそっ！ 判った。引き受ければいいんだろっ、あんたらの操縦^{パイロ}士を！」

その声にファンは笑顔を浮かべると、拳銃を左手に持ち代えて、右手を差し出した。

「契約成立だ、社長。いいビジネスにしよう」

グエンはその手を無視して吐き捨てた。

「殺してやる」

「その内にな」

ファンは何故か嬉しそうに嘯^{うそぶ}いた。

2 (後書き)

第2章抜かしてアップしてた……orz
すいません。急ぎよ差し替えました。
引き続き第3章をよろしく。

「おい、何をやってるんだ、お前ら!？」

デインが治療を受け、鎮静剤で眠りにつくのを見届ける。それからファンとともに再び格納庫へと戻ってきたグエンは、断りもなく機体に取り付いている男たちの姿を目にして、かっとなって怒鳴りつけた。

側面のスライド式のドアを外し、^{キャビン}客室の床に機銃架を取り付けようとしている。いずれもこの辺りの土地の地肌に準じた、薄いオリブブラウンの迷彩服に身を包みでる。そんな男達が機体に群がって作業をしている様子を見ると、まるで戦争をしていた頃に引き戻されたようで、湧き起こる苛立ちおさえられなくなる。

「構わん。そのまま作業を続ける」

さほど気にする様子もなく、ファンが続行を命じる。

「おい！」

「そんなに騒ぐことじゃないだろう。動力機銃を載せてるだけだ」

「そんなことを許した覚えはない！」

「あんたの許しは必要ない。専門家としての意見は拝聴するが、作戦上、必要と判断することがあれば、こっちの判断で実行する。それだけだ」

「作戦だと……」

「いい機会だから、ここで作戦の流れについてざっと説明しておく。現地へ飛んで、俺たちを下ろす。あんたには、そのまま上空から地上にプレッシャーを掛けてもらう。あの機銃はそのためのものだ」

「何時間、現地上空に待機させるつもりだ？ ドアを外したおかげで空力が悪化して、機体が不安定になる。燃料消費だって増える。それに俺の機体で運べるような少人数で山狩りしても、効果なんか

「別に山狩りなんかするつもりはないさ」ファンは素っ気なく答え

た。

「見つけるのはあっちの方だ。ジャイロ機使って鳴り物入りで現地入りしてやれば、向こうから見つけてくれる。それを迎え撃つ。勝つても負けてもそれで決まる。ざっと見て、いいとこ一時間つてところかな」

「……………」

よく判らない。手を抜いている様子はないのに、ファンの口調からは復讐譚にありがちな熱量を感じない。事務仕事を淡々とこなすように、必要なことをこなしているだけ——そんな口振りだった。

「あの男……ザンと言ったか。あんたから逃げてるわけじゃないのか？ 何だか、現地で待ち合わせてるみたいに聞こえるが——あの場所に何か意味があるのか？」

「……………」

ここまで饒舌だったファンが不意に押し黙る。言い淀んでいる——というより、ここにきて急に胸中に湧き起こる感情を扱い兼ねているかのような、そんな困惑した表情のようにも感じられた。

「おい、あんた——！」

「カバラス峠」

「は？」

「俺たちは、あの場所で生れたんだ。だから、あそこに戻るのは当たり前前なのさ」

そこには、余人の斟酌しんさくを頭から拒絶するような響きがあった。

だが、何を言ってるのか。

ファンの口にした「カバラス峠」は、こうして西部辺境領が戦争で荒廃する前から、人を寄せ付けない峻厳な北部山脈地帯のど真ん中だ。中原ハートランドから来た開拓民はおろか、地元の少数民族だってそこに集落を構えていたなどという話は聞かない。特に何かが採れるわけでもない、地元民だって滅多に寄り付かない。そんな場所だ。

そこで「生まれた」などと、一体、どんな寝言——

呆れて匙さじを投げかけたグエンは、はたとその場所の持つ意味に気

付いた。

古戦場。若く天才的な将校に率いられた、寄せ集めの敗残兵を掻き集めた一箇小隊。それが無謀にも、同盟くの機甲軍に挑みかかり、大打撃を与えた伝説の戦い——その戦場だった。

グエン自身は直接関与していないので、実際にどういう状況だったのかは知らない。だが、戦闘の直後から軍の広報部門が「英雄的な戦いだった」と大々的に触れ廻っていたので、話としては知っている。もっとも、実際にその戦いに参加した兵士と顔を合わせるの、これが初めてだった。

こいつは、そしてあのザンという青年も、「カバラス峠の戦い」と称されるあの戦いの生き残りなのか……。

だが、その生き残りのふたりが、こうして思い出の場所を舞台にして殺しあおうとしている。

訳が分からなかった。

「ファン！」先ほど事務所にいたヴーが、書類を挟んだクリップボードを片手にこちらにやってくる。

「機内に乗り込む人員と持ち込む戦闘資材の一覧だ」

「ふん」

受け取ったファンはつまらなさ氣に一瞥すると、そのままグエンに引き渡す。

ジャイロ機の積載可能重量を意識しながら、反射的にリストのチェックに取り掛かったグエンは、すぐに啞然とした。

「何だ、これは!？」

「何を驚いてる？」

「あんたの部下が一六人つてのはいい。軍用ヴィーグル一台も判った。

だが、この山ほど積まれることになってる型番は地雷だな？ 他にも迫撃砲に対装甲用の速射砲まで。こんなもの、一体どこで――

？」

「戦争中に武器庫から抜いたはいいが、強力過ぎて娑婆^{しやば}じゃ買い手がつかなかった代物だ。在庫品のバーゲン一掃セールってとこさ」

「……お前ら、本気で戦争でも始める気か？」

「勿論」フアンは屈託なく笑って言った。

「上から眺めてても、結構な見世物になるぜ。楽しみにしてくれ」
「……………」

たったひとりの人間を相手にするには、あまりにも過剰な火力だった。何のつもりだ、こいつら。訳が分からない。訳が分からない。

戦争は終わった。終わったんだ。

鉄と血と死に支配された戦場へ、機内にたつぷり詰め込んだ兵士と兵器を送り届け、一目散に逃げかえる毎日。火だるまになって撃墜された僚機のこと、戦場に放り出した兵士たちの迎える運命も、決して振り返ることなく基地へと逃げ帰る。

逃げて逃げて、何もかもすべてを振り切って辿り着いたはずのこの場所で、こいつらは今も戦争を続けている。平和を取り戻したはずのこの辺境の空に、こいつらは戦争を持ち込もうとしている。

いかれてる。狂ってる。理解できない。訳が分からない。

「どうした？ 顔色が悪いぞ」

「……いや、大丈夫だ」

グエンは吐き気を抑えきれなくなりつつあった。

「なら、いい。離陸チェックを始めてくれ。日没までにすべてを終わらせたい」

それだけ告げると、フアンは背を向けて機内への搬入作業を行っている部下たちの下へと向かう。

その背中を睨みながら、グエンはもう一度、「殺してやる」と呟いた。

人手や小型フォークリフトで搬入可能な資材を機内に積み込むと、クローラーで格納庫から機体を引き出し、離着陸パッドへ。一番の大物の軍用ヴィーグルは、そこで後部ハッチから機内に載せた。

「全員搭乗した」

「そうか」

身に染みついた離陸前チェックのプロセスを続けながら、グエンはファンの言葉に素っ気なく応えた。

と、そのファンが断りもなく自分の横の副操縦席に座ろうとするのを見て、グエンは思わず声を上げた。どこで見つけてきたのか、デインが使っていたヘルメットまで被っている。

「おい、あんたがそこに座ってどうする？ パイロットを連れてきてるんだろ。そいつをそこに座らせるよ」

この辺の空に慣れてなくとも、パイロットならいざという時、機体を任せることもできる。少なくとも航法の支援くらいはできるだろう。わざわざ副操縦席に座らせる意味はある。

「ああ、そのことが。あれはウソだ」

「はあ？」

さらりと言つてのけたファンの言葉を、グエンは一瞬理解できなかった。

「おまえさんがその方が納得しやすいだろうと思ってな」

「ふざけるな！」反射的にファンの胸ぐらを掴んで怒鳴っていた。

「案外、手が早いな、あんた」

「黙れ！ この話はここで終わりだ。俺はここで降りる！」

「それはないな」グエンに掴まれたまま、ファンは何の動揺も見せずと言った。

「あんたにここで降りられると俺たちは困るが、あんたはもっと困ることになる」

「何だと？」

「あの坊やを殺す」

ストレートに告げられたファンの言葉が、一瞬、グエンの胸に冷

たいナイフのように刺し込まれる。

「……そ、それがどうした」

この手の輩との交渉には弱みを見せては駄目だ。たとえそれが致命的な弱みであっても、どうということはないように見せかけねばならない。

「強がつてもダメだ。操縦桿を握ってる時はどうかしらんが、こうして地上にいる間は、あんたにあの坊やは見捨てることはできない。あんたがここで降りるのは自分の意地でしかない。それが所詮、意地にすぎないと自分で判っている以上、そのために他人の命を平気で捨てられるような人間じゃない。それがあんたの限界さ」

「……何で、そんなことが——」

「さっきあの坊やを撃った時のあんたの取り乱しようを見れば判る。あれであんたの底は割れた。交渉事でタフさを気取るなら、あの時点から始めとくべきだったな」

「……………」

図星だ。唯一の社員であり、ほとんど家族のように接してきているデインを見捨てることはできない。激昂する感情に任せて、何もかも見捨てて、放り出す。気持ちよくテーブルをひっくり返して、後は知ったことかと開き直ることはできない。

社会人として当然のこと……？

いや、自分がかつてそれをやってのけたことがある。周囲の迷惑も考えず、何もかも振り切って、こうして辺境^{エッジ}まで逃げてきたではないか。

それなのに、いつの間にかそれができなくなっている自分にこそ愕然とする。

「……あんたには、出来るっていうのか？」

「さて、どうだろうな」

苦しまぎれのグエンの問いに、ファンは軽く肩をすくめて見せた。「さあ、手を離して、離陸準備に戻ってくれ。これ以上もたもたしていると、日が暮れちまう」

「殺してやる」

「三度目だな、あんたにそう言われるのも」

二回目も聞こえてたのか、とグエンは眉を顰めた。こんな男でも油断や隙などを見せることなんてあるのだろうか、と今度こそ聞かれないように胸で呟いた。

3（後書き）

前章の事務所に続いて、格納庫↓ジャイロ機機内に場所を移してグエンとファンの駆け引きが続きます。

で、本編中に出てくる「カバラス峠」なる地名についてが『棺のクロエ2 超高度漂流』<http://bit.ly/9C2tL3>内でちらと出てきた地名です。

この場所と縁のある「あの人」が本作でも出てくるかどうかは……その辺は楽しみに。

次回はいよいよ離陸。カバラス峠の奥深くで、遂にザンとも接触するのですが……。

更新は来週10月2日（日）の予定です。
ではまた

ティエンソン航空のある空港からカバラス峠までは、まっすぐに飛ばば一時間ほどで着く距離だ。だがそれは、ジャイロ機では越えられない数千級の山々や空軍の電波警戒機サイトの存在を無視すれば、の話である。

ファンの持ち込んだ航空地図の通りに飛ばば、倍の二時間以上は確実に掛かりそうだった。空軍とはどういう話になっているのか知らないが、いずれも警戒電波圏すれすれの場所を飛ぶようになっていた。電波警戒機サイトはそれぞれ近隣のサイトと担当範囲がある程度被るように配置されており、後方の防空指揮所でそれをクロスチェックして脅威判定を下す体制が構築されている。それでも地形や電波警戒機の性能的に感知しがたいスポットがぼつぽつと存在し、そこを縫って飛べというものだった。

どうも空軍とは「堂々と電波警戒機に映っても無視してくれる」という話ではなく、「ここらなら大丈夫そうだから、そこを飛ば」という話になっているらしい。それ以前に、そもそもどこまで話が通ってるのかも怪しいものだったが。

つまり、何らかの理由でコースを外れたら、即座に撃墜されても文句も言えない、ということだ。

しかもそうしたスポットはことごとく、飛行に適しない難所ばかりときている。山肌ぎりぎりまで迫まらねばならない峻険な渓谷や気流の荒い谷間を抜ける。考えてみれば当たり前だ。普通なら誰も選ばないような危険なルートだからこそ、電波警戒機サイトの整備も遅れているのだ。

そんな危険なルートを積載重量ぎりぎりのジャイロ機で飛ぶ。しかも、副操縦士に航法を任せることもできない。事実上、ひとりきりの飛行だ。

飛行中、一切の気の緩みは許されなかった。ファンがわざわざグ

エンに操縦桿を握らせたかったのはこれが理由だったのだろう。この条件で無事に目的地まで辿り着けるのは、この西部辺境領北部でもほんの数人――民間ではグエンひとりに違いない。

そのファンとは言えば、ヘルメットの遮光バイザーを跳ね上げて、副操縦席から大きな双眼鏡を振り廻して機外を観察中だった。何が楽しいのか、万年雪に覆われた山肌を熱心に見ている。離陸以来、ほとんど口を利かないのは助かるが、いい気なものだ。もしかすると、復員兵がかつての自分の参加した戦場へ観光にでも来ているような気分なのかもしれない。

神経を磨り減らす操縦の横で物見遊山気分でいられるのには苛立ちを覚えたが、グエンには文句を口にする余裕すらない。乗ってる連中がどう感じているか知らないが、かなりきわどい綱渡りな飛行で難所を次々に越えてゆく。

もつとも、このくらの難度の飛行は、戦時中は日常茶飯事だった。特に戦争末期には、>同盟<側の電波警戒機サイトも増え、たし、移動式の電波警戒機車両が急に展開し、予想外の場所で迎撃を受けることも少なくなかった。

敵の迎撃機もなければ、阻塞ワイヤーも張られてない。地上からの対空砲火もない。天候も比較的、落ち着いている。当時の自分が見たら、「まるで遊覧飛行だ」と鼻で嗤ったろう。

そんな飛行であっても、今の自分はびっしりと下着を濡らすほどに緊張している。帰りも同じコースを辿るのかと思うと、気が重くなる。

歳を取ったということか。あるいは、娑婆しゃはに慣れ過ぎたのか。

それでも目的地まであと少し、といった地点まで差し掛かった時、『そろそろだな』と、ヘッドセット越しに、ファンがいきなり口を開いた。

「判るのか？」

『下を見ていれば判る。戦争中はずっとこの辺で闘ってきた。ま、半分は逃げ廻ってたようなものだったがね。だから、この辺は俺た

ちにとって庭みたいなものだ』

「……………」

そんなものか？ ごつごつとした大小の岩塊を荒っぽく削り出したような地上の風景に目をやる。ろくに草木も生えていない。手入れのされない荒れた舗装道路らしきものも目に入った。＞同盟＜軍が戦時中に敷設したものだろうか。他に文明の痕跡らしきものはない。『世界の涯』^{はて}という言葉が不意に浮かぶ。何もこんな場所に来て戦争しようという奴の気がしれない、とグエンは思った。

『客室^{キャビン}に繋いでくれ。部下と話がしたい』

「判った」機内通話の回線を繋ぐ。

『間もなく目的地だ。ヴー、兵の状況は？』

そういえば、客室^{キャビン}横のドアは両側とも外されている。たぶん着地と同時に、兵員を一秒でも早く機外に飛び降りて展開させるためだろう。空間機動歩兵の得意技だが、高い標高を飛ぶポイントもあったのだ。客室^{キャビン}のシートにはエンジン排熱を利用した暖房が申し訳程度についているが、流れ込む冷たい空気で凍傷を起こす者がいてもおかしくはなかった。

だが、ヴーは平然と返してきた。

『全員問題ない。装備も兵も確認した。すぐに戦闘行動に移れる』

その無造作な響きに、グエンは戦慄した。そうだ、空間機動歩兵^{空間機動歩兵}はどんな酷い扱いを受けても、飛行中だけは文句のひとつも口にしなかった。死んだように押し黙り、機長にすべてをゆだねて黙って座っていた。きっと対空砲の直撃を喰らって火だるまになる機内でも、黙って何も言わずに焼け死んでいったのではないか——そうパイロット仲間の間で囁かれていた。グエンも戦時中、いろんな部隊の兵員を運んできたが、こんな奴らは他にはいなかった。

戦後、軍を辞めたそれぞれがどういう人生を歩んでいたのかは知らないが、少なくとも今客室^{キャビン}にいる連中の時間は、確実に戦争中のあの過酷な日々を引き戻されているようだった。

『警戒配置』

ファンが短く告げると、返事も抜きに客室^{キャビン}でどこかと兵士たちが動きだす気配がした。

「おい、ちよつと待て！ 何を始める気だ！？」

「奴は先にここに来ている。ここはもう戦場だ。あんたも、ここから先は俺の指示に従ってもらう」

「お前、何を言ってる——？」

『動力機銃に火を入れる！ 各自、全周警戒。何か異常を発見したら、すぐに報告しろ！』

ファンの指示に従って、兵士たちは自動小銃を構えたまま左右のドア脇に張り付く。同時に手近の取っ手類^{カラビナ}に金具を引っかける。急な機体の動きにも振り飛ばされないようにするためのものだ。

「……………」

客室^{キャビン}の空間機動歩兵達がぎびきびと戦闘配置を整えてゆく。操縦^{コックピット}席にある機内確認用のミラー越しに見る限り、彼らの動きに戦後のブランクはまったく感じられない。本当に戦時中に戻ってしまったかのような錯覚を覚え、グエンは軽い眩暈を感じた。

『機長！』ファンが叫ぶ。

『高度を落としてくれ』

「構わんが、どうするつもりだ？ よもやこの調子でカバラス峠全体を調査して廻るわけにもいくまい。峠全体で、一体、どれだけの広さが——」

「いや、このまま飛んでくれればいい。このコースは俺たちが峠に入っていたコースだ。このコース上のどこかに、奴は潜んでいる！」

凄い自信だが、どこからその自信が来るのか。まあ、見つからなかったら、見つからないで、この連中の戦闘に捲き込まれずに済むということなのだから、グエンとしては万々歳ではあるのだが。

指示に従って高度を落とす。地面がぐつと近づいてくる。

しばらくゆくと、似通った殺伐とした風景の中にも、少しずつ変化があるのが見て取れてきた。ところどころで、背の低い灌木がまばらに生えている場所がある。多少なりと地下水が通っているのかあるいは春の雪解け時の水分だけで、一年を生き抜くような植生なのか。茶色がかって水気のなさそうな木々の葉を見る限り、後者のような気がしてきた。

横の副操縦席では、双眼鏡を掴んだままのファンが依然、機外に目を向けている。後部の客室キャビンでも、自動小銃や動力機銃の銃口を向けながら、兵たちが周辺を目視で検索していた。

「……………」

自分はどこまでこのおかしな兵隊ごっこに付き合えばいいのか、と醒めた感慨を覚えながら、ファン達に吊られるように機外へ目をやる。その視界の片隅に、奇妙な違和感があった。そのまま視界の外に流れ去りかねない「それ」に、強引に意識を引き戻す。

「何だ、あれは……？」

「どうした？」

ファンの問いを無視して、グエンは自分用の小型の双眼鏡を取り出した。オペラグラスに毛が生えたような代物だが、大きさが手ごろで作りが頑丈なので戦時中から使っている。双眼鏡のレンズを覗き込むと、肉眼では芥子粒ほどの大きさだった何かが、人の形を持つて浮かび上がる。

部分的になだらかになっている斜面の一角に、誰かが胡坐をかいて座っている——いや、異様なのは、その周囲に何か棒のようなものが何本も突き刺さっていることだ。何かの宗教的儀式か？

ファン達はうまく見つけられないらしい。苛立ったような唸り声が、ヘッドセット越しに聴こえてくる。現役パイロットと兵隊崩れのヤクザ者では、視力に差があって当然だが、多少溜飲が下がないでもない。

もう一度、双眼鏡越しに目を凝らす。肩まで伸びた白髪。その下

から垣間見える浅黒い肌。こんな山奥では自殺行為同然のラフなボ
マージヤケット——

間違いない。あの青年——ファン達が追っているザン・セオ・キ
エムだ！

『よし、こちらも見つけたぞ！』

だが、何をやっているのだ？ 胡坐をかいて、ナイフで灌木の幹
を削っている。周囲に突き刺さる棒のような物も、ザンが作ったの
か。だが、何のために……？

『距離は約二、〇〇〇ってところだな——ここで機位を固定！』

「は？」

『聞こえなかったのか？ ここで固定だ』

慌てて操縦桿サイクリック・スティックを操作して、前進時には斜め後方に流れている頭上
の主ローターの気流を真下に調整。後は出力桿レクティブ・レバーで、重力に対して機
体が中立になるようローター出力を調整する——実際には、ゆるや
かな横風があるので、主ローターの角度を小刻みに調整する必要が
あったが。

いずれにせよ、グエンは職人芸並みの技量で巨大な大型ジャイロ
機をホバリングさせ、その場にぴたりと静止してみせた。

「本当にここでいいのか？ まだ距離があるぞ」

『駄目だ。俺が命じるまでこの距離を維持だ。それと現位置を維持
したまま、機体右側面を奴に向ける』

「了解」

機体後部のテールローターの出力を調整し、ファンの指示通りに
機体の向きを変える。

その間もファンは双眼鏡でザンの姿を捕捉し続けている。

その彼方では、ザンがゆっくりと立ち上がる。その手には、いま
で自分で削っていた棒を持っている。

『気づいたか——いや、もっと早くから気づいていたはずだぞ。舐
めやがって』

誰に聞かせるともなく、ファンが呟く。

『ヴー、動力機銃で射撃を開始しろ』

『待て。この距離から撃ちかけてもろくに当たらんぞ！』

『弾が届けばいい！ 構わん。始める！』

半ば呆れるような一瞬の間、客室キャビンからどすの効いた動力機銃の発射音が聴こえてきた。

「おい、何やって——！」

『うるさい！ 黙ってる！』

ザンの姿から視線を逸らさず、ファンがグエンを怒鳴りつける。

動力機銃で使用する大口径の機銃弾は、そこに込められたエネルギーと重量だけを考えれば、かなり遠方まで到達することができそうに見える。だが実際には、重量の大きな銃弾は、重力や横風によって弾道がぶれ易い。これだけの距離があると、狙った場所に着弾させるのはなかなか難しい。ましてや狙撃銃でもない動力機銃で弾をばら撒いているだけでは、そうそう当たるものではない。

事実、ザンの周辺に大きく外れて着弾し、本人に当たる様子はない。ザンも特に怯む様子もなく、悠然とその場に立ってこちらを見ている。

だが、さすがに射手がベテランなだけに、徐々に銃弾が収束してゆく。すぐ足元にも着弾するようになり、身体を掠める銃弾が髪や衣類を小さく引き裂く。

それでもザンは立ち尽くしたままだ。

やがてその肩に着弾——ぐらりとザンの長身が揺れて、倒れかける。

『やったか！』

いや、待て。大口径の機銃弾を人体が喰らえば、上半身を半分くらい持つてかれる。勿論、即死だ。多少、当たり所が良くても、ショック症状で死に至る。

それが何で、ああして立っていられるのか？

ザンが何事もなかったかのように身を起こす。遠目で見る限り、どこか身体の一部を削られた様子はない。さすがに着ているボマー

ジャケットは着弾した肩からざつくりと引き裂かれてはいたが、その下から見える肌は無傷なように見える。

「……………」

グエンだけではなく、ファンも客室^{キャビン}の兵士達も呆然として言葉を失っていた。いつの間にか、動力機銃の作動音も已^やんでいる。

有りえない。大口径の機銃弾の直撃を受けて、平気で立っている人間など、この世に存在するはずがない。

だが、ならば……人間では、ない——？

『まずい！』

ファンの不意に上げた声で、グエンは我に還った。

それまでその場に立ったままだったザンの身体が大きくしなり、手にした木の棒——いや、槍が放たれる。

回避する余裕などなかった。動力機銃ごと射手の身体をぶち抜いて、開放されたままの機体左側面から外へと飛び出してゆく。悲鳴すら聞こえない。一陣の疾風^{かぜ}が機内に飛び込んで、動力機銃の銃座ごと射手をさらって去って行ったかのようなだった。

待て。ちよつと待て。

「投げ槍」の届く距離じゃない。ましてや正確に射手を射抜くなど……………」

いや、その前に。

何だあれは？ 何なんだ？ ありえない。こんなバカな話——

『回避行動！ この場から離れる！』

人知の理解を越える事態に思考がホワイトアウトしかけていたグエンに、ファンが怒鳴る。

考えるより先に手足が動いて、上昇と機位の反転を開始する。

『次が来る！ 少しでもここから離れ——』

ファンが言いかけたそこで、がん、という衝撃とともに機体が震え、不意に高度が下がる。

『どこをやられた？』

「エンジンを片肺喰われた！」

続けてもう一度、衝撃——今度は後部テールローターへの動力伝達系が反応を失う。プロの狙撃兵並みの精度で、次々にこちらの致命的な箇所を狙い撃ちしてくる。

元々、軍用ジャイロ機として開発された機体だ。少々の銃撃には耐えられる防弾性能は持っている。だが、あんな太さの手槍を次々撃ち込まれる事態は、いくらなんでも設計者の想定範囲外だろう。

動力の復旧を諦めて、機体が落下する際にローターが回転することによって生じる浮力を利用するオートローテーション飛行に切り替える。だが、動力を失ったテールローターが徐々に力を失うにつれ、機体のぶれが激しくなる。テールローターが完全に止まってしまえば、機体は頭上の主ローターと逆方向にくるくると回転を始めてしまう。

「ダメだ。これは落ちるぞ……！」

『少しでも奴との距離を取ってくれ！』

このまま墜落するという発想がないのか、ファンが命じる。

「……ご期待に添えますか、ね！」

必死に機位を保ちつつ、周囲の地形に視線を走らせる。流されるように尾根をふたつみつっ越えてゆく。どこかに着陸可能な地形はないか。なければいずれ、このままどこかの岩肌に激突して、そこで終了だ。

と、視界の片隅に、奇跡的に平らな地面が目に入る。ごろごろとした大小の岩が転がっているが、背に腹は代えられない。

「そこに降りるぞ！」

サイクリック・スティック

ファンの返事を待たずに、操縦桿を押し込む。高度が一気に失われ、疑似的な無重力感に捉われる。

無限に近い時間の果てに、どすん、と足元から衝撃が伝わってきた。機体下部の着地用スキッドが地面に接触した衝撃だった。

荒く安堵の息を洩らすと同時に、今度はずりと機体が横滑りを始めた。

『何だ、今度は！？』

「……平地じゃなかった、ってことだろうな」

上空から平地に見えた着陸地点は、実際にはゆるやかな斜面だった。考えてみれば、こんな土地におあつらえ向きにジャイロ機の着地に適した平地などあるはずもない。激しく揺れる機内からの眺めだったので、見誤ったのだ。

『どうにかしろ！』

「無理だ」

地上に降りたジャイロ機に、自力でできることあまりない。ましてや動力を失った機体ならなおのことだ。

サイクリック・スティック
気休めで操縦桿を左右に振ってみるが、ゆっくりと横滑りの速度が増してゆくのを止められない。

『総員、急いで機体から脱出しろ！』

「逃げるのかよ！」

「その前に、いいことを教えておいてやる」ファンは手早く安全帯ハーネスを外し、ヘルメットを脱ぎ捨てて言った。

「この先は崖だ」

それだけ言い置くと、グエンの肩を軽く叩いて、副操縦席からずるりと抜けだした。

「おい、こら、この野郎——っ！」

怒鳴りかけたものの、グエンの去った副操縦席の向こうからは、斜面の終わり——切り立った向かいの崖の壁面が迫っていた。

今度こそダメか——と覚悟しかけたそこへ、機体の横腹から殴りつけるような衝撃が伝わってきた。身体は安全帯ハーネスで操縦席に固定されているが、その分、ヘルメットをかぶった頭部が激しく振り廻される。自分ではどうにもならない。舌を噛まないように、歯を喰いしばって耐えるのがやっとだった。

やがて機体に加えられる衝撃がやんだ後、グエンは白濁する意識の海に引きずり込まれようとする自分に気づいていた。脳震盪か。畜生。

「あの野郎、今度こそ、ぶっ殺してやる……」

それだけ絞り出すと、グエンはそのまま意識を失った。

4（後書き）

そんなわけで、あっさりジャイロ機隊とされちゃいました（爆。
まあ、元々、陸戦をやるのが趣旨だったんで、早めに撃墜される予定ではあったわけですが。

次回はカバラス峠で戦闘準備の回。

更新は来週10月9日（日）の予定です。
ではまた。

「——おい、社長。起きてくれ」

荒っぽく頬を張られる。呻き声とともに、グエンは無理やり意識を現実に戻された。

「いい加減にしろ、この野郎！」

「やっと起きたか」

グエンに胸ぐらを掴まれながら、ファンは平然と言った。

「さつきはすまなかったな。これから忙しくなるんで、あんたもこのまま寝かせとくわけにはいかなくてね」

「……そうだ。機体はどうなってるんだ？」

ファンの台詞を頭から無視し、グエンは周囲を見廻した。

「あんたの機体なら、そこに——」

突き飛ばすようにファンの胸元から手を離すと、崖の手前で無残な姿をさらすジャイロ機へ駆け寄る。

機体側面、エンジン部分と機体後部に無造作に木槍が突き刺さっている。それだけではない。着陸の衝撃が、先ほどの衝撃のためか、機体フレームがあちこちが歪んでいるのが見て取れる。その周囲に迷彩服の兵士たちが群がって、機内に残る資材を運び出している。

「何てことだ……」

年甲斐なく思わず涙腺が緩みそうになるのに堪え、近寄って改めて機体状況の詳細を確認する。

どうも、崖の手前に大きな岩塊があつたらしく、そいつに激突して崖からの転落が避けられた、ということらしい。代わりに機体左側面がその岩に喰い込まれ、大きく破損していた。これだけ破損している、たとえ持ち帰っても機体の修復は不可能だろう。

せいぜい、無傷の左エンジンなどのパーツを回収できるくらいか——と考えかけ、それ自体、不毛な仮定であることに気付く。そもそも、こんな地の涯から、どうやって帰ればいいのか……。

膝をついて呆然と壊れた愛機を眺めるグエンに、ファンが無遠慮に声を掛けた。

「社長、気が済んだら、こつちを手伝ってくれ」

さすがにこの物言いは癪に障った。グエンはファンを睨み付け、吐き捨てるように言った。

「知るか。お前ら、勝手に戦争でも何でもやってる。俺はもう、あんたらに関わり合う気はない」

「気を悪くしたんなら、謝る。それでも俺たちはあんたに感謝している。ここまで来れたのは、あんたのおかげだ。着陸時に機体が失われていたら、装備品の大半を失っていたところだ——それでは、奴を殺すことができない」

「……殺す……？」

グエンが疑念を口にする。ファンは頷いて言った。

「そうだ。奴はここへ来る。それを俺たちで迎撃して、殺す——少し段取りが変わったが、当初の計画通りだ」

「……………」

機銃弾の直撃を受けて、平然と向き直ったザンの姿を思い出した。そして手製の木槍で遠方を飛ぶジャイロ機を撃ち落す戦闘力——はら肚の底から恐怖がまた湧き起こってくる。

そいつを「殺す」？ 正気か、こいつら？

「……あれは、何だ？」

グエンは乾いて張り付く声帯から、無理やり問いを絞り出す。

「俺もよくは知らん」マシーナリイ・コ・マシーナリイファンは首を横に振って応えた。

「だが、戦時中、機神という無敵の兵士がいると聞いたことがある」

「それなら、俺も知っている。」

マシーナリイ機人の中の機人。完全に機械化された一箇師団を単独で撃破し、あらゆる火器や機械車両と接続して支配下に置き、無線の傍受や妨害も思うがまま。マシーナリイまさしく機人の神——故に称して機神。マシーナリイ・コ・マシーナリイ

……だがそれは、不利な戦況の中で兵士たちが作り出した妄想の産物だ。そんなものが実在していたら>帝国<はもつと楽に戦争に

勝ってる」

「そうだな」ファンはいったん頷いてから続けた。

「では、あれは何だ？」

「……………」

「俺が聞いた機神の話には、あらゆる銃撃を跳ね返す、とあった。

事実、ドウツクルンで、拳銃やらショットガンやら自動小銃やらで、至近距離から滅多やたらに撃ちこんでやったが、平気な顔でその場を立ち去りやがった。機銃弾ならあるいは、と思ったが、あの様だ」

「……本当に、奴は機神なのか？」

「さあな。ドウツクルンで奴を襲ったときは、手下に持たせた無線に妨害や傍受を受けていたような様子はなかった。だから世間で噂されてるような機神とはちよつと様子が違ふところもある。だが、少なくとも、まっとうな人間じゃないのは見ての通りだ」

だから、この重武装だったのか。確かに、あれが伝説の機神なら、これだけの重装備も頷ける——いや、こんなもので足りるわけがない。

だが——

「あの男、あんたの幼馴染だといったな？ 戦争中も一緒にいたんだろう？ 何で、そいつが機神になんかになって戻ってきたんだ？」
「さあな。俺が知るわけないだろう」ファンは顔を苦く歪めて言った。

「確かにあの時——武器庫を吹っ飛ばした時、あいつの屍体は確認していない。直後に憲兵に現場を封鎖されて、手が出せなかったかな。だから、何かの手違いであいつが生きて帰ってくる可能性はゼロじゃなかった。あくまでゼロじゃないってただけだな。

だが、だからってあんな化け物になって帰ってくるなんて、誰が想像するかよ！」

ファンはこれまでグエンの前で示していた余裕のある態度をかなり捨て、感情を顕わにし始めていた。

「正直、あいつが本当に俺たちの知っているザンなのかも判らない。

だが、あいつがザンの皮を被った化け物なら俺たちで殺さなきゃならない。あいつが本当に俺たちの知るザンなら、もう一度、俺たちがこの手で殺さなきゃならない。それは、俺たちの仕事だ。他の誰にもやらせるわけにはいかない——だから、俺たちはここに来たんだ」

「……………」

よく判らない。だが、出発前にファンがグエンに語った理由は、表面的なものでしかなかったことになる。ファンとザンの間にある真実が、何であるかはまだ判らない。だが、たぶんここで語られた感情が真実なら、彼らは——カバラス峠の生き残りである元空間機動歩兵達は、勝敗を度外視しても戦いをやめないだろう。

「……それで、俺に何をやらせたいんだ？」

「兵士をひとり喪った。ぎりぎりの人員で作戦を立てていたので、手が足りなくなつて困つてる」

「俺に歩兵の真似事は無理だぜ」

「そんなものは期待していないさ」ファンは軽く肩をすくめて言った。

「あんた向きの仕事を用意してある」

「これが俺向きの仕事だつてのか！」

「ご不満か？ 運転のお仕事には違いないだろ！」

軍用ヴィーグルで荒野を走りながら、ファンは助手席のグエンに怒鳴り返す。

ファンがグエンに与えた仕事は、軍用ヴィーグルの運転手だった。助手席にはファンを、後部荷台やトランクには兵員や戦闘資材を載せ、ファンの指示に従つて、あちらへこちらへと軍用ヴィーグルを走らせていた。

「くそ！ あんたにいいように使われてないか、俺？」

「嫌なら歩いて帰ってもらってもいいぞ。人里までどのくらいある

「知らんが」

「……………」

何が「人里までどれくらいあるか知らない」だ。世界記録アタック級の標高の峰々に囲まれ、地元民すらろくに近づかない土地からどうやって徒歩で抜け出せというのか。勿論、地元で操縦士パイロットをしている身だけに、おおざっぱな地形くらいは頭に入っている。だが、そこに人間が歩いて通れる道がどう走っているか、までは知らない。確か、>同盟<軍も工事に難航して、最後には軍用道路の開通を諦めたのではなかったか。

唯一可能性があるとするれば、彼ら、「カバラス峠の戦い」の生き残りである空間機動歩兵達の記憶のみだ。彼らはあの戦いの後、歩いて峠から離脱している。

それに土地勘のない自分がひとりで辺りをふらつくより、サバイバルのスペシャリスト集団と行動を共にした方が、生還の確率は格段に跳ね上がる。

問題は、その辺の事情をわきまえたファンにいいように使われるということと、彼ら元空間機動歩兵達は、あの化け物——ザンとの戦闘をまったく諦めていない、ということだった。

ジャイロ機が降りたのは、先刻、ザンを見かけた場所からは、険しい尾根をふたつみつづばかり越えた場所にある山の斜面だ。その間には、登山の素養があるくらいではそうそう越えられない、危険な溪谷がいくつもある。ここにいる連中同様、ザンが山岳歩兵上がりだったことを考えても、普通に考えれば接触まで一日、二日は掛かると考えてよかった。

だが、ファンは、ザンとの接触までの時間を六時間とした。

「あいつに常識は通用しない。こっちの都合で『人間』扱いするな」の一言で、彼の部下たちは納得したらしく、特に疑問を差し挟む様子もなくそれぞれの作業に戻っていった。

限られた時間で戦闘準備を整えるには、指揮官の発言にいちいち疑問を抱いてはやってられない、ということか。

その一方で、グエンに運転をさせて、軍用ヴィーグルで周囲の地勢をざっと見て廻った後、部下たちの配置を指定した。勿論、兵士たちをそれぞれの配置箇所まで運ぶのは、グエンの運転する軍用ヴィーグルだ。

「よし。今のでラストだ。我々はここで待機。戦闘が始まれば、移動しながら指揮を執る。燃料を補給しておいてくれ」

「……兵隊をばら撒きすぎじゃないか？」

軍用ヴィーグルを岩陰に隠すように停めながら、グエンは率直な疑問を口にした。

既に陽も落ちかかっている。ファンの読み通りなら、ザンとの接触は完全に日没後だ。

ファンの行った部隊配置は、ジャイロ機の残骸を底にして大きなU時を描くような形をしていた。前方から来るザンを斜面上に誘い込んで、両翼から銃砲撃を加えて身動きを取れなくし、最終的にはその場で叩き潰すか崖から追い落とすか——そこまではいいとして、わずか十数名の兵士たちを二三人づつに分けて配置していた。これでは、個々の単位でザンに捕捉されれば、すぐに殲滅されてしまう。

「奴の短距離疾走能力は、この車を全力で走らせたときと同じだ。懐に入られたら、次の瞬間には殺られてる——ドウツクルンでそれなりに犠牲を払って学んだ教訓だ。ましてや部隊をまとめて、そこに奴に突つこんでこられたら目も当てられない。」

元より対機人^{マシーナリイ}戦闘は、アウトレンジからタコ殴りが定石だ。^{セオリ}至近距離での格闘戦になった時点で、勝負はついている」

「奴が別の方角から来たら？ 素直に上から斜面に入ってくれるとは限らんだろう」

「その場合は、兵の配置を動かす。一部の砲装備以外は、戦闘状況に応じて適宜、動かせるようにしている。そのために、無理をしてこの軍用ヴィーグルを用意して、無線機も全員に行き渡らせた」

ファンが箱型の携行無線機^{ウォーキー・トーカー}を手にする。

「今時の兵隊はひとりづつ無線機を持つてるのが普通なのか？」

「まさか。高価だし、周波数の割り当ても面倒になる。現場の兵士一人ひとりが、未整理の情報を電波に乗せても混乱するだけだ。この人数だからやれる話さ」

そんなものか、と思ったが、陸の兵隊の事情を知らないグエンには、ファンの言っている話が妥当なのかどうかもよく判らない。

だが、こちらの疑問に対して即座に論理だった回答を示す姿勢や、部下たちに矢継ぎ早に的確な指示を下す態度を見ると、ある疑問が湧いてきた。

「なあ、あんた――」

「何だ」

「何で、軍の物資を横流しなんかしたんだ？」

長い沈黙の末、ファンは苦いトーンで逆に訊ねた。

「……何で、そんなことを訊く？」

「あんたの仕事ぶりを見てみると、仕事の出来ない奴に見えないからさ。部下にも信頼されているようだしな。俺の知っている限り、本業で仕事の出来る奴が不正を手掛けるケースは少ない」

「それは、あんたの知見が狭いだけだろう」

「かもしれないが、だとしたら、あんたの場合はどうなんだ、と思っ
つてね」

「……………」

しばらく続く沈黙の後、ファンは苦痛を押し殺すような表情で語り始めた。

巷間知られた英雄譚とは異なる、「カバラス峠の戦い」の物語を

5（後書き）

決戦に向けた戦闘準備の回です。

何だかんだ言って、結局、捲き込まれて手伝う羽目になってるゲンは、やっぱりいい人なんでしょうなあ。

次回からしばらく回想編です。

ちょっと長めとなりますが、懲りずにおつきあいください。

更新は来週10月16日（日）の予定です。
ではまた。

ファンとザンは元々、西部辺境領北部に早くから入植していた開拓民の子ども達で、一緒に野山を駆け廻り、小さな分校で机を並べて勉強した仲だった。

どうということもない、特徴のない少年たちで、あえて言えば、ファンの方が少し短気で喧嘩っ早く、ザンの方が思慮深い性格であるように周囲からは捉えられていた。

ふたりはいつも一緒に、急に何かを見つけて走り出す小柄なファンの後を背の高いザンが追いかける様子は、近所の風物詩だった。

そのまま大きくなれば、先祖の拓いた農地を順当に継いで、それをほんの少しばかり広くして子供たちに引き渡す——ただそれだけの人生をふたりとも送り、やがて老いて辺境の土に還るはずだった。

一八になり、徴兵試験を受けた。心身頑強なり、と特に問題もなく二人とも合格した。力仕事の多い田舎の男子としては、周囲から「男」として認められるために必要な儀式であり、むしろ不適合とされる方が問題だった。二人は胸を張って、軍隊に入隊した。

入隊後の新兵イジメには閉口したが、それもさほど疑問を持たずに受け入れた。訓練は厳しいとの触れ込みだったが、農家である実家の手伝いの方がよほど過酷だった。農作物を荒らす害獣用に銃器の扱いには長けていたし、農業機械の整備で機械仕事にも慣れている。

むしろ率直に言って、二人は軍隊生活を楽しんでいたと言っている。

ここまでは別に彼らの父祖とそう違う人生だったわけではない。ただ、彼らにとって不幸だったのは、彼らの入隊した>帝国<陸軍は戦争——それも寄りにもよって、自分たちと同等かそれ以上に工業化された大国>同盟<との戦争の真っ最中だったということだった。

入隊から半年間の基礎訓練の後、ふたりとも特に専門訓練の必要のない歩兵とされて、戦地に送られた。

と、言っても、すぐに戦闘に参加したわけではない。

激戦を闘っている前線部隊の後方にこのこと付いて行って、兵站部隊の警護や占領地の警備などを行っていた。前線が移動すれば、それを追いかけててくと歩く。行った先でまた警戒任務だ。危険がないわけではなかったが、敵兵の顔も見ないで一日中、立っているか歩いてるかの任務が「戦争」なのか、と自分でも首を傾げる毎日だった。

結局のところ、彼らの入隊した部隊自体が、練度の低い部隊とみなされていて、それ相応の扱いを受けていた、ということであっただけらしい。

そんな彼らの奇妙な「戦争」の日々は、ある日、不意に終わりを告げた。

> 帝国<軍による、いわゆる「大陸打通作戦」なる全戦線一斉の五〇万人の攻勢作戦が發起し、> 同盟<側の構築した大陸を半ば縦断するスケールの一大要塞群の前に完全な敗北を遂げたのだ。> 帝国<皇族を司令官とするこの作戦の損害は三〇万に達し、戦争の行方致命的な禍根を残すこととなったが、この作戦で死傷した将兵の大多数は、> 同盟<側要塞攻略戦によるものではない。

ほんの数時間の戦闘で数万人が死傷する——とっかん 呐喊する歩兵連隊が、後続部隊の目の前で文字通り、瞬く間に跡形もなく「消滅」するような有様を各地の要塞で見せられた前線部隊がまず「崩れた」。後は、それが次々に後続部隊を巻き込んで崩壊し、やがて津波のように全戦線に波及する。

この> 帝国<軍史上、空前絶後の歴史的な大壊走に、ファンとザンは巻き込まれた。

当事者としては、何が起こっているのかも判らなかった。

ただ前線から、次々と兵士が群れを成して戻ってくるのだ。それ
もまともな部隊を維持しているものはほとんどいない。小銃すら放
り出し、目を血走らせてこちらに走ってくる。

そしてその後方から、満を持して投入された＜同盟＜軍機甲部隊
が逃げ惑う敗残兵たちへ襲い掛かる――

状況を理解する前に虐殺の真つただ中に叩き込まれてしまったふ
たりは、他の兵士たち同様、ただ逃げ惑うことしかできなかった。

やがて、＜同盟＜軍の追撃を逃れた者たちは、ろくに水も食料も
なしに真夏の砂漠地帯を踏破せねばならない事態にまで追い込まれ
た。当然のことながら、万の単位の犠牲者がそこで発生している。

結局、中原まで逃げ帰った司令官を見限った陸軍参謀本部によつ
て、後方兵力の再編が急遽行われ、敗残兵の収容も実施された。

それで助かった者たちの内に、ファンとザンのふたりの名前もあ
った。

ふたりの最初の兵役での「戦争」は、こうしてみじめに逃げ惑う
だけで終わった。

その大敗北に終わった夏季大攻勢からしばらくして、ふたりは二
年の兵役を終えて、帰郷した。

ザンは出征前と同じ農家仕事の日々にごく自然に戻っていった。
戦場での経験は、彼の心にも深い傷を残したはずだが、労働に精を
出す彼の姿からは、おくびにも感じられなかった。あるいは、彼を
支える恋人の存在も助けになったのかもしれない。

だが、逆にファンは塞ぎがちになった。家業も手伝わず、一日中、
自宅に引籠もるようになった。かと思うと、急に喚きだして家族に
暴力を振るうようになった。明らかに一心的外傷後ストレス障害《
PTSD》の症状だったが、この時期の＜帝国＜の一般的な医療基
準では、それを病気としては認識していない。

結局、周囲の人々からはただの「乱暴者」として認知され、そつ

と距離を取って扱われる対象となった。

それでも、見慣れた故郷の風景が、少しずつ緩やかに彼の精神を癒しつつあったそこへ、二回目の召集令状が届いた。

> 帝国< 国法の定める徴兵期間は、ひとりの人間に対して一生に一度きり、二年間のみとされている。

だが、そこには「非常事態にあつては、地元師団の権限で必要な数の兵員召集を行うことを与う」という付帯事項がついていた。

戦争終盤になっての> 同盟< 軍による西部辺境領北部への侵攻は、現地> 帝国< 軍司令部によれば充分に「非常事態」になると判断された。現地軍司令部は軍役経験者で歳若い者から順に召集令状を発行し、事務手続きに則って粛々と発送した。そこに情実の入る余地はなかった。そんな余裕もなかったというのが、現地軍司令部の本音であつたろう。既に戦闘は始まっているのだ。

従つて、自宅に籠るファンの下にも、日を経ずに召集令状が届いた。

「嫌だ」と言つて暴れるファンをザンが訪ねたのはその翌日である。ファンの心は戦争で傷ついていた。それは戦場で死にそうな目に遭つたからではない。巨大な「戦争」の前に、自分の無力さを思い知らされたからだ。

壊走する味方の群れに捲き込まれたとき、ファンは頭が真っ白になつて何の判断もできなかった。> 同盟< 軍戦車の機銃が兵士たちを背中から次々に射抜いている時も、悲鳴を上げて一緒に逃げ惑っていた。

その腕を掴み、足元の屍体の下に自分の身を押し込んだのはザンだった。その後も、止めを刺して廻っている> 同盟< 軍兵士の隙を見て逃げ出したのも、行く先々で食料や水を調達し、どこへ逃げればいいのかの情報を仕入れてきてこれからの行動を提案したのも、ザンだった。

それに黙って従いながら、何もできない、何の判断もできない自分を、ファンは自分自身でありとあらゆる呪詛をつむいで延々と責め続けていた。

彼にとつて「戦争」とは、自分の価値を徹底的に貶めるためのものでしかなかった。

だから「嫌」だった。もうあんな場所には行きたくない、と心から思っていた。あんなところに行ったら、自分の精神は今度こそ粉々に破壊されてしまうと思った。

だが、「行かない」という選択肢はなかった。

通常の兵役でさえ、村の誉ほまれであり拒否は許されない。それが今度実際に地元に迫るゝ同盟<軍と戦うための召集である。拒否したことが知られれば、村人からリンチを受け、下手をすれば殺されかねない雰囲気ふんいきが村内には漂っていた。

だからこそ、ザンが心配してファンを訪ねてきたのだ。

「大丈夫だよ。ファンには俺がついてるし」

「……お前こそ、どうなんだよ。嫁さん、置いて征けるのかよ」

「しょうがねえよ。嫁さんより、あんたとの付き合いの方が長いんだから」

そう言つて屈託なくザンは笑った。

二度目の兵役は、さらに扱いが酷かった。

基本的に負け戦なので、行く先々で転身転身の連続で、ろくに弾を撃つ前に逃げる算段から始めるありさまだった。

その内に、ある日、いきなり「お前たちは今日から、『空中機動歩兵』だ」と上官から命じられ、寄せ集めの他の兵士たちと一緒にジャイロ機に押し込められると、敵の前線後方に放り込まれた。

部隊は一回の戦闘で、あっけなく全滅した。

指揮を執る少尉のやけくそ染みた血走った眼を見た時点で「これは駄目だ」と早々に判断したファンとザンは、戦車部隊に無謀なとんな

喊を掛ける部隊の背後からそつと抜け出した。

後はふたりで助け合って前線を抜け、>帝国<側支配地に辿り着くだけだ。

だが、>同盟<側の進行速度は恐ろしく早く、どこまで行っても前線に辿り着けない。

湯水のように湧いてくる>同盟<軍の後方警戒部隊の目を掻い潜りながら、前線を目指す。どこまでも。どこまでも。

「……結局、今度の戦争でも逃げてばかりだ」

「大丈夫だ。逃げるのなら、俺たち随分と得意になったじゃないか」
愚痴るファンをザンが陽気に励ます。ひもじい腹と、悲鳴を上げる身体に鞭を打って逃げ続ける内に、ふたりはやがてひとりの将校と出喰わした。

「よう、その兵隊。>帝国<の兵隊なら、飯を喰わせてやるから、ちよつとばかし手を貸してくれないか」

軍用ヴィーグルからそう声を掛けてきた将校は、ヒュー・タム中尉と名乗った。

久しぶりの食事らしい食事である軍用糧食レーションをがつついて喰べるふたりに、中尉は自分が新しい部隊を作ることになった、と話を切り出した。

「——で、だ。軍司令部からは一兵も出せん。現地で何とかしろ、と言われてな。しょうがないので、司令部がやってる空中機動歩兵の生き残りを自由に部隊に繰り入れて構わないと一筆書かせて、ここにきた」

「……………」

いきなり貴様らの生殺与奪の権限を握つてると明かされて、ふたりは呆然とする。

そしてお前らが新設部隊の最初のふたりになるので、残りの兵隊を掻き集めるのを付き合え、と。

その日から、砲火の飛び交う最前線を駆け廻って、空中機動歩兵の残存兵を拾い集める毎日がしばらく続いた。いずれもついこの間までのふたりのように、肉体も精神もボロ雑巾のようにくたびれ果て、みすばらしく膝を抱えて震えていた。そんな彼らに食事を与え、新しい戦闘服を与え、自分たちがどうやって敵の前線を抜けてきたのか、どこをどう通って、どんな敵とどう戦ってきたかを聞き取り、報告書にまとめるまでがふたりの仕事だった。

その仕事は、ファンの精神を回復させることに繋がっていた。かつての自分と同じように傷つき、自信を喪っている彼らに接することで、自分に起こったことを客観視できるようになったことが大きかったのかもしれない。

こうして中尉の下で働きながら、部隊最古参の兵士のひとりとして、いつの間にかファンは事務局長のような仕事をするようになっていた。

どうも中尉の肚^{はら}としては、土地勘のある空中機動歩兵を中心に、敵陣後方へ浸透突破を図る特殊部隊のようなものを作りたかったらしい。最終的には大隊規模程度のものを考えていたようだが、結局そこまで辿り着く前に、彼らを取り残して前線の方が先に後方に引き下がってしまった。

「我々だけ、取り残されたんですか!？」

「残ったんだよ、司令部の了解とってな」

ファンの問いに、中尉はいつもの飄々^{ひょうひょう}とした口調で応えた。まったく危機感を感じていないかのようなその態度に、腹が立つより先に開いた口が塞がらなかった。

「敵の機械化された一箇軍団が迫っていると聞いて司令部はケツをまくって逃げ出すことを即断したわけだが、俺に言わせれば三日は遅い。この辺の部隊全部に一斉に撤退を指示するものだから、みんな途中の隘路で詰まって自分そこで足留めだ。敵に背中向けてる分だけ、却って射的^{しやく}の的になる」

「だからって、我々だけここに残ってどうするんですか？」

「いや、ここじゃない」中尉は粗末な指揮卓上に広げられた地図の一点を指差した。

「カバラス峠——ここに籠って、歩兵一箇小隊で機械化一箇軍団を引きずり廻してやる」

新しい悪戯を思いついた子供のように、実に楽しげに中尉は言うてのけた。

撤退する他の部隊から捲き上げたとかで、わずか一箇小隊にも関わらず、トラックなどの車両と通信機の数には異様なほど充実していた。それと、どこから掻き集めてきたのか対戦車火器類もトラックの荷台に山のように詰め込まれていた。

中尉が示したカバラス峠は、>同盟<が新たに造った軍用幹線道路のすぐそばにあり、侵攻しようとしている機械化一箇軍団のほとんどがここを通るものと見られていた。

天然の要害であるカバラス峠から車輛や徒歩で出撃し、>同盟<軍の車列を襲撃しては即座に撤収する。それを延々と繰り返されては、確かに>同盟<側にとってはかなり厄介な嫌がらせになる。

早々に事態を理解した>同盟<軍司令部は、比較的大規模な部隊を編成して、カバラス峠の掃討作戦に投入した。

それこそ中尉が待ち望んだ状況だった。

峠の複雑な地形に戦車や歩兵部隊を誘い込み、敵部隊を寸断して殲滅する。山裾に張り付く細い街道沿いに伸びる隊列を横殴りに襲撃し、崖から突き落とす。

峠の至る所に武器弾薬を集積し、少人数の兵員をトラックやバイクで縦横に動かしながら、魔術的な鮮やかさで中尉は兵を指揮し、>同盟<軍部隊に出血を強いた。

それに付き従いながら、ファンは「これが本当の『戦争』なのか！」と驚きを隠せなかった。

これまで彼の知る「戦争」は、みじめに逃げ廻ることではしかなか

った。だが、決して準備に手を抜かず、きちんと作戦を練って、然るべき能力の指揮官に率いられば、「勝つ」こともできる。敵を搦じ伏せて、蹂躪し、殲滅する。これが「戦争」なのか——「勝つ」ということなのか。

「勝ち」の味を知った兵隊は強い。一〇二度の勝利を経ただけで、敗残兵の集まりに過ぎなかった兵たちに自信が宿り、部隊の動きも見違えるように良くなった。

そんな彼らを、中尉は徹底的に酷使した。限られた兵力を限界ぎりぎりまで効率よく活用するため、一日に幾度も出撃させ、何度も戦闘を繰り返した。こんなことを繰り返していたら、すぐに部隊は疲弊してしまうはずだが、異常な興奮状態にある彼らは気にしなかった。

ファンはそれらの戦闘のほとんどに参加し、短い期間の間に急速に中尉の示す「戦争のコツ」のようなものを学習していった。

要するに戦争を規定するものは、「頭数」と移動能力を示す「脚」、それと敵が何を求めているかの「目的」、だ。それが判れば、彼の動きが読めるようになる。とは言え、それは平時に一〇〇万冊の専門書を読んでも身に付くことのない感覚だった。最前線で場数を踏んで、なお資質のある者のみが辿り着くことのできる境地だった。

ほどなく、ザンとともに中尉の代わりに分隊を率いて指揮を執るようになくなった。要領よく部隊をまとめ、運動させて、敵を襲撃する。その繰り返しの日々。

そして戦闘での小さな勝利を繰り返す内に、ファンは彼なりに「戦争」を理解した。

「勝つ」ために何をすればいいのか——自分が「殺す側」に立つために何をすればいいのか。

せっかく造った幹線道路を使わずに進軍の足を止められた。同盟軍司令部は、頭に血を登らせたかのように次々に大軍を繰り出してきたが、元より道の狭い山間部、しかも地の利を敵に取られてい

る状況でそれが活用できるはずもなく、無為に犠牲を重ねるばかりだった。

が、その一方で、その間に別の対策も打っていた。

カバラス峠に立てこもる>帝国<軍部隊の出撃範囲外にルートを選んで、新たに軍用道路を開通させたのだ。司令部が指示してから半月にも満たない、>帝国<の土木水準から見れば常軌を逸した工事速度だった。

それが開通した時点で、ファン達の存在意義はゼロになった。

その事実を司令部から知らされた中尉は即座に撤収を判断したが、それはそれまでの戦闘よりはるかに過酷な選択だった。>帝国<軍主力はとくに後方に引き下がっており、カバラス峠から一步外に出れば、廻り中、>同盟<軍の支配下地域である。敵中を大きく突破しなければ、味方とは合流できない。

せめてもつと早く情報がもたらされていれば打つ手もあったのだが、ここに至ってはそれを言っても始まらない。

峠に籠って戦っている間はひとりの戦死者もださなかった部隊は、その後の敵中突破で約半数まで撃ち減らされた。

その途中で、中尉も右腕を砲弾で吹き飛ばされたが、担架で担がれながら部隊の指揮を行った。敢闘精神が強いというより、危機的状況に陥れば陥るほど楽しくなってくる質らしく、最後まで悲壮感の欠片も見せない男だった。

やがて一週間ほどの敵中での放浪を経て>帝国<軍支配圏に部隊は辿り着き、戦史的には「カバラス峠の戦い」はこれで終了した、ということになっている。

6（後書き）

回想編です。

どこかで聞いたような名前の将校さんが顔出していますが、この頃からはた迷惑な人だったということ。

しかし、これだけ書いて、回想編がさっぱり終わる気配が見えず、書いてるときは泣きそうでした（はは）。

次回も回想編。「カバラス峠の戦い」の後、ファンとザンのふたりの関係に訪れた変化とその結末まで。

更新は来週10月23日（日）の予定です。
ではまた。

だが、生き残った者たちにとっては、そうではなかった。

一端、部隊再編のために後方に送致されている間に、彼らを取り捲く環境が一変していた。

軍の広報誌で「大戦果を挙げた英雄的な戦い」として大きく取り上げられたのだ。

「これは俺たちも、いよいよ戦争の英雄ってことか!」「故郷に帰ったら、鼻が高いぜ」「村のねーちゃん達から、『キャー、素敵!』なんつって、抱きしめられたりしてよお」

「バカ、記事をよく読んでみる。その記事は俺たちを持ち上げることで、北部軍司令部が早期に部隊の撤退を進めたことを間接的に非難してる。

広報誌っていったって、そいつは中央で発行された奴だ。軍中央は、北部軍が戦力を最後の一兵まですり潰してでも時間を稼ぐのを望んでるが、それに従わない北部軍司令部をよく思っていない。北部軍司令部は俺たちみたいな現地召集兵の部隊は使い捨てにしても、練度の高い正規兵部隊は早めの後退させて温存させているからな――」

「そう言った、あてこすりが記事に反映されてるんだよ」
はしゃぐ兵士たちに、ヴーが苦々しく指摘する。

「まずいことになりそうか?」フアンの方に、ヴーは頷いた。

「……司令部にいる知り合いから聞いた話だが、中央から余計なちゃちゃを入れられない内に、部隊を解散させちまおうって動きがあるらしい」

「まさか!」「そんな!」

「中尉はどうした。まだ入院中だろうが、そんなことになったらあの人が無くなってはいないはずだ」

「……あの人は、駄目だ。連絡がつかん。どこの病院に入院してるのかも、調べても出てこない。そもそも、北部軍司令部付きの将校

じゃないらしいという噂もあつて――」

「何だと？」

「中央からてこ入れのために送り込まれたらしい。それを言うなら、短期間であれだけの物資を調達したり、北部軍司令部の命令を無視したりと、とても一介の中尉の権限でできることじゃなかったわけだが……」

「そんなことより、部隊が解散したら、俺たちどうなっちまうんだよ！」

「たぶん、原隊復帰――元の部隊に戻されるんじゃないか」

「俺の原隊はとくに全滅しちまつてるよ！」

「いや、そういうのも含めて、また空中機動歩兵に戻されることになる……」

「……………」

その場に沈黙が下りた。口封じのために、事実上、死刑宣告がなされたに等しかった。

「ヴー、その司令部の知り合いを通じて、部隊解散を避けるための働きかけはできないか？」

「肝心の指揮官が行方不明じゃ、話の持って来ようがない。ただ――」

――

「ただ？」

「参謀の中に中央復帰を露骨に望んでる奴がいて、そいつが政治工作のために金を必要としてるって話があるが……」

「そいつを買収すんのかよ！？」「いいぜ、俺の手持ちの金を全部出すよ！」「俺もだ！」

「バカ野郎！ そんな端金で足りるかよ！」

騒然となる周囲をヴーが一喝し、ファンの前に顔を突き出して言った。

「金を作ることから始める必要がある。それも尋常な手で収まりの付く金額じゃない。判るよな？」

「……何故、そんな話を俺にする？」

「中尉がいない今、部隊の指揮は分隊長のあんたが執るべきだ」

「ザンがいる。あいつだって、俺と同じ分隊長だ」

「あの人はこういう話に向いてない。軍隊生活が綺麗ごとだけじゃすまないことを、理解していない」

「ここにザンがいないのは、そのためか……」

「部隊の解散なんかさせない。俺たちはバラバラじゃ駄目だ。カブラス峠であれだけの力を発揮できたのは、この面子だったからだ。部隊を解散させられ、またひとりひとりの兵隊になって前線に放り込まれたら、逃げ惑うだけの弱い兵隊に逆戻りだ。判るだろう？

この部隊でなきゃ、駄目なんだよ！」

「判ってる。判ってるさ……」

ファンは深く息を吐いた。決断しなければならない。生き残った兵たちを率いる事実上の指揮官として、しなければならぬ決断をするのだ。

「それで、俺は何をすればいい……？」

段取りはヴーに任せた。

元々、娑婆でも裏の世界に通じていたというヴーは、武器庫や燃料補給処の担当者と接触し、瞬く間に物資横流しの組織を構築した。実際の横流しの実務については、歩兵である彼らの出番はない。伝票の操作や、経理のごまかしが主だからだ。その代わり、取引先に荷物を届け、代金を回収するのが彼らの仕事だった。より正確に言えば、彼らの腕っぷし——すなわち「暴力」によって、ビジネスの枠組みを維持するのが役割だった。

金は面白いくらい簡単に手に入るようになった。戦争中なのだ。物資はどこでも不足している。前線でも、後方でも。表側からだろうが裏口からだろうが、その流れに関わることができれば、莫大な富を約束されたようなものだった。

結局、ヴーの伝手^{つて}で接触したその参謀は、部隊解散を回避するた

めの対価としてあきれられるほどの金額を提示してきたが、それを払ってもおつりがくるほどの金が手元には残った。

ファンはそれを元手に、司令部内や有力な部隊の動向を把握する独自の情報網を構築した。

例の参謀はほくほく顔で中原に戻っていったが、自分の後釜の参謀をファンに紹介するのを忘れなかった。以後、北部軍司令部の内情は、ほぼリアルタイムでファンに筒抜けとなった。

戦況は悪化の一途を辿っていた。いつ何時、部隊が最悪の戦場に放り込まれるかも判らない。いつまでも前線に出ないというわけにはいかないまでも、せめて「勝てる」戦場に、そして「勝てる」ための装備や環境は揃えたい。そのためには、情報はいくら集めても足りなかった。

お飾りの将校を指揮官にして、実質、ファンとその一党によって運営される部隊は、負け続けの北部戦線でひとり勝ち続けた――勿論、勝てそうな戦場にのみ、投入され続けたからでもあるが。

だが、そうして構築されたファンの私的な「組織」は、つまるところ、軍隊組織にとって物資の横流しだけでなく、部隊運用にまで恣意的に影響を及ぼす、最悪の寄生体となりつつあった。

そんなある日、ファンはザンに呼び出された。

「ファン、君たちが横流ししている物資は、本当なら前線で使われるべきものだ」

「知ってる」

「前線で届かなかった武器や、燃料や、食料のために、かつての俺たちみたいに餓えて、怯えながら過ごしている兵士たちがいるって考えたことがないのか？」

ましてや作戦にまで影響を与えて、自分達だけ助かるうだなんて、そんなこと許されるはずがない！」

「俺は……この部隊を守りたかったただけだ。一緒に戦ってきた仲間たちがばらばらにされて、力を発揮できずに殺されてゆくのを見過ぎしにできなかった。だから、俺にできることをやっただけだ」

「違うだろう」ザンは容赦なく指摘した。

「あんたは、ここでようやく自分が認められる自分になれた。だから、それを喪うのが怖いんだ」

「……………」

凶星だった。凶星過ぎた。

この部隊にいれば、かつての愚鈍で、戦場で何の判断もできない、怯えて逃げ惑うだけの役立たずな自分ではない。分隊指揮を任され、>同盟<軍部隊を何度も叩き潰した優秀な指揮官。戦場では部下から慕われ、勇敢で、的確な判断を下せる一人前の下士官でいられた。それができたのは、自分の能力故、と無邪気に信じられるなら、どれほど幸せだったろう。

だが、これはあの中尉がおぜん立てした、この部隊だからできたことだ。ファン自身がひとりひとり前線から拾ってきた敗残の空中機動歩兵達。敗北の締めさを知る彼らは、自分たちが「兵士」として尊敬と自負を得られるのは、ここしかないことをよく知っている。だからこそ強い結束を保つことができたのだ。

他では駄目だ。この戦争が続いている間、自分が「兵士」として生きてゆくには、この部隊が必要だ。

だから、どんなことをしても、この部隊を守る――

それらすべてが、ファンの脆弱な精神^{ココロ}が生んだ我儘^{エゴ}に過ぎないことを、ザンは情け容赦なく指摘したのだ。

どうする？ どうすればいい？ これを部隊の他の人間に知られたら――

いや。その事実を知るのはザンだけだ。

部隊が設立されるまで、自分がどれほど臆病で無能な兵士であったかを知るのは、ザンだけだ。後になって入隊した兵士の中には、有能な分隊指揮官としての自分以外を知らない者もいる。

^{ザン}こいつさえ、そのことを口にしなければ。

^{ザン}こいつさえ、いなければ。

ザンは泣きそうな表情に顔を歪めて言った。

「判つてくれ。そんなことより、もつと大切なことがあるだろう！」
判つちやいない。こいつは本当に判つちやいない。

ファンは急速に冷え込んでゆく精神の奥底で呟いた。

俺にとって、何が本当に大切なのか、何でおまえは判つてくれな
いんだ？

「北部軍司令部から武器庫の員数調査で将校が来る。たぶん、ザン
が密告したんだろう」

「帳簿の操作は？」

「完璧だ。だが、結局、弾薬庫や武器庫にある実数と付き合わせさ
れれば、それで終わる」

「ならば、いつそ吹っ飛ばすか」

何の感情も込めずに、ファンは告げた。

「吹っ飛ばすって、お前——」

「跡形もなく吹っ飛ばしちまえば、員数調査もへったくれもないだ
ろう」

「それはそうだが」

「事が露見すれば、懲罰部隊送りじゃ済まない。関係者全員、即決
で銃殺されてもおかしくない。それだけ危ない橋を渡ってるんだ、
自覚を持て」

躊躇するヴーに、ファンが冷ややかに指摘する。

「わ、判ってる。だが、将校がわざわざやってくるってことは、よ
ほどのことだ。多分、弾薬庫の調査だけでなく、ザンと接触して証
拠か何かを入手しようって肚かもしれん」

「なら、あいつもそこに呼ぶさ」

何気ない口調で、ファンは言った。

「……いいのか、それで？ ザンとは、昔からの馴染みなんだろう
？」

「爆弾の手配は任せる。日取りが決まったら教えてくれ。ザンには

俺から伝える」

「……………」

硬い表情で言葉を失うヴーを残し、ファンはその場を立ち去った。

「ザン分隊長が弾薬庫の中に入りました！」

「……ファン、やるぞ」

起爆ボックスを手にしたヴーが、こちらを向いて言った。暗闇の中でも、表情が強張っているのが判る。幾度も修羅場を掻い潜った歴戦の勇士とは言え、顔見知りの身内を騙して吹っ飛ばそうというのだから、抵抗もあるだろう。

「俺がやろう」

「いや、しかし——」

「俺が、やるべきだ」

「……………」

ヴーから起爆ボックスを受け取ると、無造作に握りこむ。

爆轟。

弾薬庫のような引火性の危険物を管理する施設は、半地下に掘りこまれた穴の中に建てるよう、>帝国<陸軍施設隊のマニユアルで規定されている。だから爆炎と衝撃波は周囲には向かわず、遮蔽物のない上空へと吹き上がる。

その天まで伸びる真っ赤な火柱を見上げながら、ファンは自分の中で何かの感情が永遠に失われ、もう取り戻すこともないのだと知った。

7（後書き）

回想編その2です。

どんどん酷い話になってきます。

しかし、少佐（作中ではまだ中尉だけど）は、この頃から怪しげな任務に就いていたのか……。

次回もまだまだ回想編。戦後のファンの人生とザンとの再会まで。
更新は来週10月30日（日）の予定です。
ではまた。

戦争が終わった。

ファンがあれほど拘こった部隊はあつけなく全員除隊の上、解散が決まった。元より正規の部隊ではないのだから、戦後の大規模な縮軍の中で維持できるはずもない。必然的に「組織」も解散となった。ひとまず実家に帰ろうと訪れた故郷は、荒れ果てた廃墟と化していた。一時、>同盟<側の占領下にあり、>帝国<軍との攻防に捲き込まれて荒らされたのだという。気候もだいぶん変わり、水源や田畑も汚染されて耕作不能となっていた。

実家の農場にも立ち寄ったが、何者かに略奪され、火をかけられたらしく、月日を経た無残な焼け跡だけが残されていた。

「……………」

変わり果てた故郷の姿を何かに刻み込むように、無言で村内を歩き廻っていたファンは、土地を離れることを拒否して残っていた老人から、村人が移住先として選んだ土地を教えられた。

交通機関などまだろくに復旧していない道を徒歩で三日踏破して辿り着いたその場所は、陽当りの悪い山間の土地だった。水はけも悪く、地味も痩せている。ここで農業をするのは、かなりの努力が必要とされるだろうと思った。

自分の家族は、早々に中原ハートランド近くの親戚を頼って移住している。この土地を訪ねたのは、ザンの家族に彼の死を伝えるためだった。

とは言え、ザンの一家で生き残っている肉親らしい肉親は、新婚早々で出征することになった妻だけだった。父親は戦鬪に捲き込まれて命を落とし、老いた祖母はこの地に移住した最初の年の冬を越せずに亡くなっている。子供はまだいなかったから、彼女だけがザンの唯一の縁者ということになる。

既に軍からの通知でザンの「戦死」は彼女に伝わっているはずだったが、自分の口から伝えるべきだと思ったのだ。

と言って、自分で殺したという話ができるはずもなく、当たり前障りのない思い出話をした。さめざめと泣き続ける彼女に、「自分のできることがあれば何でも手伝いますので、声を掛けてください」とだけ告げて、その場を辞した。

翌日、近所の廃屋で荷解きをしているところへ彼女が訪れ、「彼の話をもう少し聞かせてください」と頼まれた。

それが二日、三日と重なるうちに、彼女が本来求めているものを理解し、ファンは彼女を抱いた。或いは、これまで彼女がこうしたことを求めたのは自分だけではなかったのかもしれない、と何となく思った。だが、こんな辺境の地で女がひとりで生きるということの意味を考えれば、責める気にはなれなかった。ましてや、彼女が本来最初に庇護を求めるべき夫のザンを殺したのは自分自身だ。

いくばくかの罪悪感が残ったが、辺境では生きることが最優先とされる。

ファンは彼女と一緒に暮らすことにし、痩せた土地を借りて畑を耕し始めた。

だが、ろくに肥料も農機具もない状況で、出来ることは限られている。収穫期に得られそうな出来高がほぼ見えてきたところで、大人ふたりが暮らすにはだいぶ無理がある現実が見えてきた。

途方に暮れかけていたそこに届いたのが、ヴーからの「手を貸してほしい」と書かれた手紙だった。

元々、ドウツクルンの裏社会の出身だったヴーは、除隊後、そのまま元の鞘に戻った。

ただ、戦後のドウツクルンには、戦地で除隊となった兵隊崩れの青年たちが大量に流入し、アンダーグラウンド地下社会でも問題となっていた。裏社会の既存秩序を一顧だにしない連中で、力づくでどうにかしようにも彼らの方が暴力沙汰には慣れている。

そこでこうした連中を束ねられる人間を呼んで、既存の裏社会に

組み入れてしまおうというのが、ヴーの提案だった。

勿論、ヴーがそれだけのために自分を呼んだとは思ってない。恐らくはいずれ街を牛耳る老人たちに対抗し得る勢力にするつもりくらの肚はらであることは、想像に難くない。

迷いがないわけではなかったが、このまま辺境でくすぶっていても展望が開けるわけでもない。結局、ヴーの誘いに乗ることにした。

荒事になることは予想できたので、先行してひとりでドウツクルンを訪れたファンは、ヴーが既に呼び寄せていたかつての仲間たちと合流した。いずれも除隊後に苦労を重ねていた連中だ。

なじみの仲間たちと「一家」を構えたファンは、さっそく跳ね上がりの兵隊崩れの若者たちに、戦場仕込みの苛烈な「挨拶」を叩き込むことから始めた。

衝撃と恐怖——相手の想定を超える打撃を加えることで、思考を停止させ、こちらの支配下に置く。そのための技術。

殺人や拷問を一切躊躇わず、抵抗するものは容赦なく掃討した。規律と統制の取れた戦闘集団としてドウツクルンに表れたファン一家は、ほんの数ヶ月で他の兵隊崩れの若者たちを殲滅するか傘下に収めてみせた。

ドウツクルン裏社会のボスたちはこの結果を喜び、ファン一家に利権の一部を分け与えた——これから番犬として忠勤に励め、とファンは妻をドウツクルンに呼び寄せた。

ドウツクルンの裏社会の生態系に組み入れられた。安心して使える武闘派として。闇の利権の守護者として。暴力を日常の生業として、生きる者として。

そんな日々が何年も続いたある日、屍者の訪問を受けることとなる。

最初は奇妙な目撃情報からだった。

事務所の周辺で最近よく見かける男の姿が、ザンに似ているとい

うのだ。

「まさか」

「髪が真っ白だったんで最初誰だか判らなかったが、今日も来てたんで確認した。間違いない、ザン分隊長だ」

「……………」

一家の中核を担う部隊の元隊員たちは、分隊長だったザンの顔をよく見知っている。間違える可能性は低い。

「生きてたのか…………？」

「そんな馬鹿な。あの時、弾薬庫の周りは俺たちで固めていた。爆発前に外に出た形跡はない」

「だが、屍体を確認した奴もいない」

「そりゃあ、あれだけの爆発で、しかも現場はすぐに憲兵隊に封鎖されたんだ。確認の仕様がなかった」

「ならば、そいつは誰だ？」

ファンの問いに、答えられる者はいなかった。

「まあ、いい。俺に用事があるんなら、その内、俺の前に顔を出すだろう」

「警護の人員を増やそう」

「あいつが俺に会いにくるのに、か？」

「忘れたのか？」 ヴーは指摘した。

「お前が、あいつを殺したんだぞ」

「………… 好きにしろ」

ドゥックルンの繁華街の中心部、市内でも最高級に属するホテルのロビーで、その再会は果たされた。

「ザン…………… これは、お前がやったのか？」

「……………」

悲しげな表情で佇むザンの足下には、^{たまた}ファンの配下の者たちが横たわっている。いや、足下だけではない。パニックを起こした一般

客達が潮が引くように逃げ出した広いロビーのそこに、正装の屍体が転がっている。おそらく、すべてファンの部下だ。拳銃を手に握ったままの者も少なくない。全滅したのなら、ここにいた十名以上ということになる。

獲物は何だ？ 手に持つてるナイフか？

ナイフというには肉厚の刃と、ナックルガード——あるいは短刀ショートソードと呼ぶべきか。

だが、どうやって……？

この日、上部組織からの要請で、ハートランド中原からの客人との会合の警護任務を請け負っていた。

堅気の衆にまぎれて、拳銃で武装した男たち二〇人近くをホテル内に送り込み、ホテルの外部も十重二十重に取り囲む。別に抗争中というわけでもなし、多少大げさに過ぎるとは思ったものの、客人に対するハツタリも兼ねるとのクライアントからの注文には従わざる得なかった。

そのホテルのロビーにザンが現れたとの報告があり、接触するとその部下の声を聴いたのがほんの二三分前。慌てて駆けつけてみれば、ロビーは既に血の海と化していた。

一段高い位置にあるエレベーターホールから、ファンはロビーに立つザンを見下ろす。もう一度、ロビーを見廻したが、他に生きている部下はいない。たです佇むザンの姿から視線を逸らさず、左肩にかけたホルスターから拳銃を抜き、銃口を向ける。

「ザン、お前……何しに来た？」

と、ファンの背後でエレベーターが到着するチャイムが鳴った。

「ファン・フィン！ お客人がお歸りだ。車を正面に——」

背筋を氷柱で貫かれる。ロビーの状況が伝わってないのか？ 会合を終えた組織幹部と客人が、エレベーターで下りてきたのだ。

「そのままドアを閉めて！ すぐにこのフロアから——」

振り返って叫びかけるも、エレベーターのドア前には長身のザンが既に立っていた。

いつの間に移動した……？ 瞬間移動——いや、まさか、そんな……！？

ザンはエレベーターの中に踏み込み、無造作にショートソードを振るい始める。

「やめる！」

ファンは自動拳銃の弾倉内の銃弾すべてを一気にザンの背中に叩き込む。

が、着弾の衝撃で僅かに身体が揺れるばかりで、惨劇を阻止できない。

何がどうなってるんだ？ 空になった弾倉を床に落とし、新しい弾倉を装填する。だが、至近距離からの銃撃を平然と受け留めるこの相手に、それが何の意味を持つのか……。

ザンが何事もなかったかのように、ふらりとエレベーターから出る。背後からは何も動く気配がない——くそ。皆殺しか。

理解できない。何もかもが理解できない。

だが、^{はら}肚の底で本能が泣き叫ぶように恐怖を撒き散らすのを擦じ伏せ、裂^はぱくの気迫とともにファンは叫んだ。

「ザン、今さら何の用だ！」

返事は訊かない。代わりに引き金を引き、全弾速射——だがその瞬間、ザンの姿は掻き消え、銃弾はエレベーターの壁に吸い込まれた。

「消えた……？」

背後のロビーでガラスの割れる音。ロビーの窓ガラスを割って、そこから逃げ出したのか。強固な防弾ガラスをどうやって割ったのかまでは、考える氣力が湧かない。

ただ、助かったという思いで、緊張が抜ける。大きく息を吐いて、床に膝を突く。

「どういうことだ？」ファンは呻くように問うた。

「何故、俺を殺さない……ザン？」

「全員に召集を掛ける。市内を隈なく探せ。奴はまだこの街から出ていないはずだ」

「写真が現像できました！」

ファンは部下から手渡された写真を確認する。雑踏の中を駆ける白髪のザンの横顔。

「すぐに焼き増しして、全員に持たせる。それと無線機もだ。発見しても手は出すな。接触を継続して、居場所を確保しておけ」

事務所に戻ったファンは、矢継ぎ早に指示を下した。

「上層部の方は大騒ぎだぞ」上部組織とファン一家の連絡要員として事務所にいるヴーが告げる。

「まあ、当然だがな。あのホテルであんたらが警護についてて手も足も出ないんじゃ、この街で安全な場所はない」

「年寄連中は放っておけ。それより、ザンだ」

「本当に奴なのか？」

「間近で顔を見た。間違いない」

「あんたを殺しに来た……？」

「見ての通り、俺は五体満足だよ。部下も客人もみんなぶっ殺されたがな」

「客人が狙いで、あんたはついでか。殺し屋にでもなったのかね？」

「俺がヤクザをやってるくらいだから、生きてりゃ、どんな仕事に就いてても不思議じゃない。だが、そういう次元の問題じゃなさそうだ」

ファンはホテルでのザンの様子を詳しく語った。それを聞いて、しばらく無言で考え込んでいたヴーがやがて口を開く。

「……機神マシーナリイ・ゴッドというのを聞いたことがあるか？」

「話くらいはな。だがそれが？」

「今のザンの様子と、その機神マシーナリイ・ゴッドの話がいろいろ重なる」

「だとして、何で奴がそんな化物ものになつて戻ってこなきゃならん？」

「そこまでは知らん。だが、仮にそうだとすると、我々の戦力では

手に余るぞ……」

「お前、どこか俺の知らない隠しポケットに、機械化師団でも詰め込んでるのか？ そうでなきゃ、どこまでいっても、手持ちの札で勝負するしかあるまいよ」

「しかし——」

「奴の居場所が判りました！」室内に駆け込んできた部下が叫んだ。
「ボスの邸宅に現れて、警護の者と戦闘を始めているそうです！」

「……………」

ファンとヴーは顔を見合わせた。

ファンが現地についた時点で、既に屋敷の一部に火が廻っていた。正面玄関周辺には、武装した部下たちの屍体が散乱している。ピツクアップラックの後部に機銃を載せた武装車輛テクニカルさえも、きれいに真つ二つに切断されて横転していた。妻子の状況を確認したかったが、生きて動いている者さえ見当たらない。

邸内から銃声が聴こえてくる。まだ生きている者がいる。

「ついてこい！」

自動小銃を抱え、部下たちの先頭に立って邸内に突入する。

邸内は至る所に、屍体が転がっていた。武装した部下も、そうでない家政婦や家人も、区別なく殺戮されている。屍体を確認すると、どれも刃物で急所を一突きされていた。あのショートソードか。銃を持つ者も、ほとんど発砲の痕跡がない。引き金を引く余裕すら与えられなかったのだろう。

再度、屋敷の奥から発砲音。炎も本格的に屋敷全体へ廻り始めた。焦燥を抑えつつ大声で妻の名を呼びながら邸内の各部屋を検索する。

夫婦の寝室のドアを開いた瞬間、ショットガン散弾銃の銃口を突き付けられた。
「あなた……？」

そんなものを買ひ与えた覚えはなかったが、年代物の長銃身のシ

ヨットガンを堂に入った手捌きで振り廻し、ファンの頭部から銃口を外す。

「その銃はどうした？」

「母の形見よ。こっちに引つ越してきた時に、念のために荷物に入れておいたの」

こいつもやはり辺境の女か。小さな嘆息を洩らしつつも、状況を確認する。

襲撃が始まった直後に、ファンの部下たちからここに隠れるように指示されたのだという。

「ここを出るぞ」

「子供たちがまだ奥の部屋に——」

「それは俺が探す。お前は先に——」

「奴が来ました！」

部屋の外から、部下の叫びが聞こえる。

反射的に外へ出ると、通路の向こうからザンがゆつくりとこちらに向かって歩いてくる。ファンの部下たち、十数人の男たちが向ける拳銃、短機関銃^{SMG}、自動小銃、ショットガンなどの銃口にもまった^{ひる}く怯む様子はない。

ファンは躊躇うことなく命じた。

「撃て」

轟然と銃声が鳴り響き、硝煙と銃火で前が見えなくなる。銃声。

空薬莖が排莖口^{エジェクション・ポート}から弾き出される金属音。銃弾が肉を打つ着弾音——

——それらが混然一体となった戦場音楽。^{ウォー・ミュージック}

「……………」

全身で銃弾を受け留め、狂ったような死の舞踏^{ダンス・マカブル}を演じるかつての親友の姿を、ファンは無言で凝視し続けた。

「撃ち方やめ！」

銃弾を撃ち尽くす頃を見計らって、ファンは発砲を停止させる。

部下たちは何も命じなくとも空になった弾倉を手早く交換する。

ファンは通路に漂う濃い硝煙の向こうにあるはずの、ザンの姿に

目を凝らす。

殺ったのか？ 否、殺れたのか……？

やがて硝煙が薄らぐそこに、無傷のまま幽鬼のように立つザンの姿を認めたファンは、即座に発砲の再開を命じようとする。

が、遅かった。

ファンが声を発するより先に、部下たちの築く銃陣へ突っ込んだザンは、無造作にショートソードを振るい始めた。

絶叫。怒声。至近距離からの発砲。後頭部を拳銃で撃たれたザンが、何事もなかったかのように振り返り、撃った本人の首をひと薙ぎで刎ねる。……。

その有様をファンは呆然と眺めていた。恐怖の感情さえ、湧いてこない。まったくの空白。ホワイトアウト。見知った部下たちを、無表情のまま、黙々と解体してゆくかつての親友。何だこれは？ 何なんだ、これは……？

悪夢、というのもおこがましい、目の前で繰り広げられる惨劇の前に、ファンはただ圧倒され、立ち尽くす。

そして最後のひとりを手にした自動小銃ごと袈裟がけに斬り捨てたザンが、ゆっくりとこちらを向いた。

殺される。いや、俺がこいつを殺したのだから、こいつに殺されるのは当然だ。すべてはあの日から約束されていたこと。人生の帳尻が、ここでつく。それだけのこと。

だが、ザン。お前は……お前は、本当にザンなのか……？

背後から銃声。ザンの身体がぐらりと揺れる。

「その人に近づかないで！」

その声で、撃ったのが妻だということに気付いた。駄目だ。やめる。判っているのか？ お前が今撃ったのは、お前の――

一端、身体を崩したザンが、ゆらりと身を起こす。と、そのショートソードを持つ右手が一瞬、見えなくなる。

「……？」

背後から妻の短い悲鳴。振り返ると、その豊かな胸元に刀身が深

々と突き刺さっていた。

「……あ、あなた。子供たちを——」

銃を取り落した妻が壁に背をもたれて、ずるずると力なく床に崩れてゆく。

「……あ、ああ……あああああああああああああ！」

獣のような咆哮が、肚の底から湧き起こる。

殺してやる。殺してやる。殺してやる。

戦争中に敵にさえ抱くことのなかった真っ黒な殺意が、一瞬にして全身を支配する。

「ザーンっ！」

ファンは自動小銃の銃口を、眼前のザンに向ける。

「！？」

だが、そこには既にザンの姿はなかった。

どこに行った？ 後ろか？ それとも——？

不意に後背から身体を抑えつけられた。あまりに強い力で、身動きが取れない。

——何だ！？

パニックに陥りかけるファンの耳元で、懐かしいザンの声が聴こえた。

「大丈夫だよ」

それはあの日、家を訪ねてきたザンが、自分の二度目の徴兵に付きあうと屈託なく告げた、あの穏やかな口調そのままだった。

「あそこで——カバラス峠で待つてる」

「待て。お前、何を——！？」

次の瞬間、激しい衝撃とともに、ファンの意識は途絶した。

「……………」

目が覚めると、自分の屋敷が業火の中に崩れ落ちようとしていた。
「目が覚めたか？」

「……ヴーか？」軽い頭痛に眉を顰めながら、ファンは訊ねた。
「ザンは？」

「判らん。俺たちが着いた時、あんただけがここに寝かされていた。
奥さんと子供たちは……？」

「たぶん、あの中だ……」

「……………」

しばし絶句した後、ヴーは意を決するように告げた。

「組織の最高評議会の決定を伝える。客人が殺された件で、犯人の
首をお前が持つてくるか、お前の首を中原の客人の所属組織に差し
出すか、どちらかふたつにひとつだそうだ」

「……面倒だな。先に年寄連中の方を殺っちまうか」

「おい！」

「冗談だよ」ファンは力なく笑い、訊ねた。

「今、声を掛けて何人ついてくると思う？」

「せいぜい一五〇六人だな。俺を勘定に入れて。他は全部、今度の
一件で死んだか、逃げ出してるだろう」

たぶん残ったのは部隊の生き残りの連中、か。

戦後に自分が苦労して積み上げてきたものは、今夜ですべて喪つ
てしまった。仕事も。家族も。社会的信用も。

だが、それでもこの戦友たち^{ながま}が残ってるなら、何、さほど絶望的
というわけでもない。

「カバラス峠」

「何だ？」

「カバラス峠で待つ、とさ」

「ザンがそう言ったのか？」

ファンは頷いた。

「あいつは何を考えてるんだ……？」

「さあな。行って訊くさ、本人に」

ファンは立ち上がった。これだけの最悪の状況に叩き込まれなが
ら、気分は思ったほど悪くない。少なくとも、自分が向かうべき場

所だけは判っている。それでいいじゃないか、という思いがある。
ファンは告げた。
「行くぞ。カバラス峠に」

8（後書き）

回想編完結編……と言いつつ、次回もグエンの過去話ですが。それはそれとして、前からヤクザものもやってみたかったんですよね。

ノリ的には東映ヤクザものというより香港ノワールですけど。その内、長編で本格的にやりたいですね。

今回はグエンの過去話。それだけでは短いので、ザンとの戦端が開かれるまでの2話をお届けします。

更新は来週11月6日（日）の予定です。
ではまた。

「まあ、こちらから訊いておいて何だが……」

ファンの口からここまでの経緯を聞いたグエンは、困惑して言った。

「コメントに困るな」

「そんなものはいらん」

そっけなくファンが返す。

「そっちはどうなんだ？ 前にも訊いたが、あんたのキャリアだつて、こんな^{いなか}辺境でくすぶってる玉じゃなかるう」

「俺のはもつと単純な話さ」

元々、パイロットに憧れて空軍に入ったグエンだったが、入隊時に適性検査に落ちて整備士コースに廻された。それに不満はないではなかったが、別に機械いじりが嫌いな^{たち}質でもなかったので、ひとまずはその人生を受け入れた。

こうして整備兵として軍人生活をスタートしたグエンだったが、戦争が激化する中、新設のパイロット養成コースに転属を申し出た。ジャイロ機導入による大規模な部隊設立に伴い、既存のパイロット養成コースとは別に、ジャイロ機用のパイロット養成コースが設立されたのだ。要するに既存の航空部隊が自前のパイロットや候補生を廻すのを嫌がった、ということのようだが、グエンにとっては渡りに船だった。こんなチャンスでもなければ、整備兵上がりでパイロットになれる可能性はまずない。

さっそく申し込み、ほとんどノーパスで合格した。

その結果が西部辺境領北部山岳地帯でのあの過酷な任務の日々だったわけだが、それも終戦で終わりを告げた。

さすがに軍務には懲りたグエンは、引き留める上司に除隊届を叩

きつけて中原南部の実家に戻った。^{ハートランド}

実家では操縦とも機械整備とも無縁の仕事を転々とした。保険の営業から、工場の組立工まで。どれも不思議と長続きしなかった。どこも数ヶ月で転職する羽目になる。それでも終戦直後の混乱期を過ぎると、^{ハートランド}中原全体の景気が上向いてきており、転職先には困らなかった。

その内、見かねた身内の紹介で、地元の役場に勤めることになった。ここは少し長く続いた。やがて職場の女性職員と好い仲になり、ほどなく双方の両親に挨拶に行く間柄になった。

職場にも結婚の報告をし、仲間たちから暖かく祝福された。

結婚式の前日には、酒宴を催してくれ、皆の前でさこちない挨拶をした。

何もかもうまくいっている。これからは、こういう他愛のない人生を生きて、他愛もなく老いて、他愛もなく死んでゆくのだ。妻を大切にし、やがて生まれる子供たちを大切にし、子煩悩なパパだと周囲から呆れられる毎日。……………。

それを実現することもできずに死んだ戦友たちからすれば、贅沢にもほどがある人生だ。

何の不満があるうか。

だが、パーティーの席を抜けて、トイレの鏡に映る真つ青な表情の自分の顔を見たグエンは、その瞬間、自分の本心はこの状況を何ひとつ受け入れていないことに気付き、愕然とした。

駄目だ。これは「俺」じゃない。俺がいるべき「場所」じゃない。周囲の祝福も、幸せな結婚生活も、穏やかな日常も、何ひとつ、自分が望んじやいないことに気付かされたのだ。

その夜、別れの挨拶もせずにもそのまま街を出た。自宅にすら立ち寄らず、長距離バスに飛び乗っていた。

家族や、職場の仲間や、特に明日結婚式を執り行うことになっていた婚約者がどれほど困惑するかを考えてみたが、もう既にどこか遠くの他人の出来事のように、さほど感情移入できず、その内に考

えるのをやめた。

ただ、ただ、そこから逃げなくてはという衝動だけが、グエンを衝き動かしていた。

それも「どこへ」と行先に当てがあつたわけではない。

飛び乗った長距離バスが西へと向かつていたのは偶然だ。たまたま職場の仲間達からの結婚祝いで膨らんでいた財布をはたいたら、ちょうどドウツクルンまでで尽きたことに至つては冗談に近かつた。ドウツクルンに着いたグエンは、最底辺の日雇い仕事で糊口をしのぎながら、パイロットの仕事を探した。空を飛べる仕事なら、何でもよかった。そうやってやっと見つけたのが、今の仕事だったのだ。

「……それもまあ、あんたらのおかげでパーだ」

「そいつは、悪かつたな」

「いや、いい——いや、良くはないけどな、やっぱり」

うまく言いたいことがまとまらない。グエンは後頭部を掻きながら、言葉を探した。

「ただ、あんたの話聞いて、自分のことも振り返つてみたとき、結局、人生つてのは、どこかで帳尻を合わさなきゃならんもんだなつて、そんな気がしてきた」

「よく判らんな。何が言いたい？」

「知つての通り、俺は戦争中、あんたら空中機動歩兵を前線の向こうに送り届けて、現地で放り出しては逃げ帰るつて任務に就いていた。酷い話だ。でもそれは元々、そこまでの任務と規定されていたし、それ以上の責任を負う理由はない。勿論、そこまでだつて充分に危険な任務だしな。他人様からとやかく言われる筋合いはない。

だが、やっぱり酷い話は酷い話だ。

だから、ひとりの人間として、いや、いちパイロットとして、自分が運んだ乗客達がそれからどんな人生を歩んだのかを気にしたつ

て、罰は当たらなかったと思うんだ。自分が関わったその『酷い話』が、せめて本当はどこからどこまで『酷い話』だったのかくらい、知っておく必要があったと思うんだ。

だけど、俺は考えないようにしてた。俺たちの仕事は、あんたらを運ぶところまでだからってな。だけど、そうやって考えられないようにして、忘れていたって、こうしていつか向き合わなきゃならん羽目になる。少々経緯は理不尽な気がするが、まるごとこれも人生と考えてみれば筋が通っているようにも見える。

結局、こうやって、人生ってのはどこかで帳尻を合わせせられるんだなって、そんな話さ。

どうせどこかで向き合わなきゃならん話なら、ここできちんとき合って、帳尻を揃えるのも悪くないか、という気になってきてる」

「そうか」ファンは小さく苦笑して言った。

「判ったように判らん理屈だな」

「言うなよ。俺もうまく説明できた気はしていない」

「……だが、俺の帳簿は全然帳尻なんか合っちゃいない」

「だから、ここに来たのか？」

「かもな」

グエンは問うた。

「見つまりそうか、その帳尻のつけ方は？」

「判らん」ファンは言った。

「だから、ぶつかってみるのさ。そうすれば、何かが見えてくるかもしれない。どっちにしろ、このままじゃ終われない」

誰にともなく告げるファンに、グエンは「そうか」とだけ告げた。そしてそのまま、暮れゆく峠の深い影の中で、ふたりはひっそりとその時を待ち続けた。

9（後書き）

グエンの過去話。

ファンの濃い過去話の後だと、本当に大した話じゃない気がするな。
ますな。

これだけだと短いので、今週はもう1章、続けて更新します。

『こちらオンドリ2、こちらオンドリ2。「耳」が対象1らしき歩
ベース・ポイント行音を捕捉。基点より〇二時一五分、距離にして二、〇〇〇!』

急にかなり出した携行通信機から、ジャイロ機のすぐそばにある
ウォークリーキー拠点にいるヴーの声が発せられた。

「『耳』?」

「音響索敵のユニットを連れてきている。地面に複数の高性能マイ
 クを挿しこんで、敵の接近を捕捉するのさ——こちらオンドリ1。
 地元民の可能性はないか?」

『高速走行中の装甲車並みの速度で、三〇度の勾配を駆け上がる地
 元民がいるなら』

「判った。総員戦闘準備。オンドリ6、地雷原を起動させる。オン
オブジェクト・ワンドリ2、対象1が地雷原に突入するのはあと何分後だ?」

『五分——いや、四分だな』

「判った。オンドリ1、これからオンドリ6後方に移動する」

ウォークリーキー携行通信機にそれだけ告げると、ファンはグエンに軍用ヴィーゲ
 ルを発進させるように命じた。

「始まるんだな?」

「そういうことだ」

ファンは後部座席から鉄カブトと防弾衣の予備を引っ張り出して、
 グエンに渡そうとした。

「あんたの分だ。流れ弾で死なれちゃ、こっちの寝覚めが悪い」

「ヘルメットだけ貰っとくよ。この飛行服には元から防弾機能がつ
 いてるしな」

仕事に就くと決まった際に、ドゥツクルンの軍需品ショップで空
 軍払い下げの飛行服を安く買い叩いて入手したのが、こんな形で役
 に立つとは思ってもみなかったが。

グエンはずしりと重い鉄カブトを頭に被り、顎紐をきっちり締

めると、軍用ヴィーグルのアクセルを踏み込んだ。

月明かりの下の獣道同然の未舗装の夜道。シャッター式のヘッドライトを最小限の光量に絞ってぶっ飛ばしながら、ファンは携行通信機^{ウォーキー}で矢継ぎ早にやり取りを重ねていた。

『オンドリ2、対象1が地雷原の手前で速度を落とした。普通の人間の歩行速度くらいだ』
オブジェクト・ワン

『オンドリ6、対象1が地雷原に入った——だが、爆発しない？ 何故だ？ 起爆回路は完璧なはずだぞ』

『オンドリ6、一時待機。社長、そこで止めてくれ』

軍用ヴィーグルを停車させると、ファンは双眼鏡を取り出して、斜め前方の斜面の上に向ける。陽が落ちる前に地雷の敷設に立ち会った辺りだ。

『オンドリ1よりオンドリ5、地雷原上空に閃光弾、発射』

『オンドリ5、了解。閃光弾を発射する』

一瞬の間を置いて、迫撃砲を装備したポイントから閃光弾が地雷原上空に発射。マグネシウムの燃焼する音とともに、周囲を真昼のように照らし出す。

グエンも内懷から自分の双眼鏡を出す。双眼鏡のレンズの向こうに、地雷原のと真ん中に立ち尽くして、上空を漂う閃光弾のパラシユートをぼんやりと眺めているザンの姿が見える。

「何で爆発しない？ 埋設した地雷の場所を読んで避けてるのか？

まあ、そのくらいの芸当はやってくれて当然か……」

ひとりごとすると、ファンは携行通信機^{ウォーキー}に短く命じた。

「こちらオンドリ1——オンドリ6、吹っ飛ばせ」

『オンドリ6、了解』
ヤー

次の瞬間、鋭い閃光を発してザンの周りで足下の地面が爆発した。
「くっ！」

知らずに起爆時の閃光を直視してしまったグエンは、思わず双眼

鏡を取り落して両目を押さえた。

「何やってんだ、あんた……」

「地雷を爆発させるなら、前もって言ってくれ！」

呆れ声のファンに、グエンが抗議の声を上げる。それを無視し、ファンは次の指示を下す。

「オンドリ1よりオンドリ5。迫撃砲の砲撃を開始。全弾斉射後、次のポイントに移動しろ」

『オンドリ5、了解。砲撃を開始。全弾斉射後、発射地点より移動』
遠くでシャンパンの栓を抜くような気の抜けた発射音。続いて雷鳴のような腹に響く爆発音が地雷原を中心に響き渡る。着弾した迫撃砲弾によって、周辺は金属スラグの暴風が吹き荒れているはずだが――

「……殺ったのか？」

「気休めだ。そんなことは始めから判ってる」

冷ややかに言い放ち、ファンはグエンに命じた。

「出してくれ。オンドリ6を回収したら、次のステップだ」

地雷原の起爆と観測を担当するオンドリ6の潜む丘陵の背後に、軍用ヴィーグルを停車。すぐに斜面を滑り降りてきたオンドリ6のふたりが、後部荷台に転がり込む。

『オブジェクト・ワン』
「対象1の所在は？」

「駄目です。迫撃砲弾の着弾後、見失いました」

「ま、そんなもんだろうな。……社長、出してくれ！」

再びアクセルを踏み込んで発進――オンドリ6が次に待機するポイントまで全速力で移動する。

「オンドリ1よりオンドリ2、その後の奴の動きはどうなってる？」

『こちらオンドリ2、失跡^{ロスト}した。おそらく地雷の起爆と迫撃砲の着弾のどさくさ紛れに近くに移動して、こちらの動きを探ってるんだろっ』

「ふん。さすがの機神様も驚いたか。だが、となると速射砲の射界に吊り出すにはエサがいるな」

『おい、まさか！？』

「そのまさか、だ。社長、反転して逆コースだ。地雷原の脇を掠めて、奴を誘き出す」

「はあ？ 何言ってるんだ、あんた！？」

「いいから、さっさとＵターンだ！」

ファンが助手席から強引にステアリングを廻そうとする。

「やめる、バカ！ 判った、行けばいいんだろう！」

グエンは軍用ヴィーグルを強引にその場でＵターンさせ、元来た道を走り出す。

「くそ！ 結局、こいつと一緒にいるのが一番危険じゃないか……！」

「指揮官先頭って言うてな。まあ、諦めてくれ」

「諦めきれるか！」

「ここで停車。エンジンは掛けたままで、指示があり次第、発進できるように」

「もう、何とでも好きにしてくれ」

先刻の地雷原のぎりぎり外縁——なだらかな斜面は地雷と迫撃砲の着弾で大きくえぐれている。後部荷台に設置された機銃座に取り付いたファンが、ざっと周囲を見廻す。

閃光弾の明かりが弱まってるのか、また周囲が薄暗くなってきた。いる。

「オンドリ１よりオンドリ５、閃光弾第二射、急げ」

『オンドリ５、了解』

再び、閃光弾。当たりを照らす人工の光。地雷と迫撃砲で掘り返された荒涼とした情景に、更に強烈な光源でコントラストが強化され、色彩が失われている。まるで地上の風景ではないかのようだ。

「ゆっくり発進。地雷原の周囲を流してくれ」

ファンの指示に従って、軍用ヴィーグルを発進させる。

「奴はどこに——？」

「さあな。その辺に隠れてるんじゃないかと踏んでるんだが」

ぞつとしない話だ。本当なら、すぐにでもアクセルを踏んで、この場から逃げ出したいくらいなのだが。強い自己主張を始めた胃の腑の重さに、グエンは眉を顰める。

ファンが機銃を左右に振りながら、周囲を伺う。

「どこへ隠れてる？ 遠くへは行つてないはずだ」

「隠れるつたつて、そんなに隠れる場所なんか……」

大の大人が身を隠せそうな樹木や岩陰は見当たらない。ならば――

「まさか、地下——？」

グエンが振り向くと同時に、爆心地の中心付近で地面の下からザンが跳ね起きる。

「ファン！ 奴だ！」

「車を出せ！」

言われなくても判つてる。アクセルをベタ踏みにして急発進。荷台ではファンが機銃掃射を開始する。その腹に響く発射音を耳にしながら、バックミラーに目をやる。上半身に機銃弾を受けながら、ザンがトラック競技の選手のように大きく両腕を振って、すぐ近くまで迫っている。グエンは声にならない悲鳴を呑みこんで、ステアリングを握りしめた。

「もっとスピードを出せ！ 追いつかれるぞ！」

「やってんだろうが！ 見て判んねえか！」

ファンは銃撃の手を止めて、ウォーキートーキ携行通信機を手取る。

「オンドリ1より各位、間もなく対象1が射界に入る。各自、射撃準備。オンドリ3、速射砲射撃準備。弾種は徹甲弾！」

「射界に入るつたつて、こんなスピードで突つ走つてる奴を狙つたつて当たらないぞ！」

「勿論、足を止める！」

「どうやって?」

「こうやってだよ!」

ファンは軍用ヴィーグルを追って迫るザンの下半身に向けて、銃撃を集中する。ザンの身体がつんのめるように前のめりになり、地面の上をころころと転がり倒れる。

「お前と何度かやりあってる内に、こつちも多少は学習してるんだよ」ファンは地面の上のザンを見下ろしながら言った。

「確かにどんな銃撃も貫通できずに弾き返してくれたが、銃弾の運動エネルギーそのままで無力化できているわけじゃねえ。だって、お前がその人間もどきの身体を捨てない限り、足を引っかければすっ転ぶ理屈に変わりはないってことだよな」

ザンが身を起こそうとする。

ファンは携行通信機ウォークーキーに冷ややかに命じた。

「総員、自由射撃開始!」ガンズ・フリー

周囲に設けられた陣地から一斉に射撃が開始された。軽機関銃の乾いた銃声。無数の機銃弾を受け留めたザンの上半身が、痙攣するように震える。

速射砲陣地からは大口径の徹甲弾が放たれ、ザンの上半身に直撃。列車に正面衝突されたかのような勢いで、ザンの身体が吹っ飛んでゆく。それをさらに追って、次々と徹甲弾と機銃弾が襲い掛かる。着弾のたびごとにザンの身体が跳ね飛ばされて、ころころと転がってゆく。

やがて大きな岩塊に背中から激突し、がくりとうなだれたまま動かなくなった。

「オンドリーより各位、射撃中止」

さすがにこれは死んだろう——と、グエンは思ったが、ファンはそうは取らなかつたらしい。

「オンドリー3、弾種交換、HEAT成形炸薬弾に切り替え。装填完了次第、発砲開始せよ」

「HEAT成形炸薬弾!?!」

HEAT
成形炸薬弾は弾頭内部の炸薬が内側に窪んだ漏斗状に成形されており、着弾起爆時に炸薬から生じる熱噴流が正面に収束するよう設計された弾種である。炸薬のエネルギーが余計な方向に洩れないので、その分、正面方向に強力なエネルギーが叩き込まれる。装甲車に直撃すれば、装甲表面に小さな穴を開けて、超高温の熱噴流を車内に流し込む。途中で溶けて液化した装甲金属と一緒に、数千度の熱噴流が車内で暴れ廻れば、中の人間はたちまち蒸し焼きになる。
ジェット・フォイル
口径の小さな火器でも、対装甲火力を高められる切り札として、先の大戦で急速に普及した兵器技術のひとつである。
マシンナリイ
だが、いくら機人とはいえ、ひとりの人間に使っていい兵器ではない。

「おい、待て！ そんなもの、人間に使うな！」

「こいつを人間扱いするな！」

と、うなだれていたザンが顔を上げ、前髪に隠れたその両眼が赤く輝いた。

「何だ！？」

地面に触れたザンの両の掌から耳障りな高周波音が急に高まり、次の瞬間、地面が爆発する。大量の土砂が捲き上がり、ザンの姿を包み隠す。

「くそ！ あの野郎！」

土砂が落ち着いて視界が戻った時、そこにファンの姿はなかった。代わりに、ついさっきまでファンがいた場所に、ぽっかりと大きな穴が開いている。

「地下に……逃げた……？」

「何なんだ、あれは！？」

「たぶん、超振動発振器——高周波を発振させるジェネレーターを腕に仕込んでるんだろう。たまに見かけるが、本来は専用の軍刀とセットで使うものだ。地面にこんな大穴空けられるほど、バカみたいな出力はないはずだが……」。

次から次へと、何でもありだな、あの野郎！」

毒つきながらファンは胸に吊るした手榴弾を抜いて、穴の中に放り込む。

爆発——だが、穴から吹き上がる爆風の低さを見て、ファンは陰しい表情を深めた。

「意外に深いな。短時間でそこまで掘れるのか……？」

そこへ、ウォーキートーキー携行通信機が切迫した声でがなり始める。

「こちらオンドリ3、奴が現れた！ 繰り返す、オブジェクト・ワン対象1がここに現れた！ 畜生、こいつどこから——」

「オンドリ3、どうした？ 状況を伝えろ！」

銃声。断末魔の悲鳴——ウォーキートーキー携行通信機はすぐに空電ノイズ交じりの沈黙に戻った。

そして、駄目押しのように、強力な速射砲を装備するオンドリ3が陣地を構えていたはずの方角から、大気を震わす爆発音。

「……………」

それが、崩壊の始まりだった。

10（後書き）

戦闘開始。ファン一家とザンの戦端が開かれるが――
これまでのシリーズでは人間相手では無敵だった機神を、逆にいか
に人間の手で追い詰めるかというのが、このシーンでのポイント。
とは言え、戦力が限られてるので、今回はこの辺が限界でしょうか
ねえ。

今回はファン一家の崩壊まで。ぼちぼちクライマックスです。
更新は来週11月13日（日）の予定です。
ではまた。

呆然としていたのは、ほんの一瞬だった。

すぐに立ち直ったファンは、ウォーキートーカー携行通信機でオンドリ2のヴーを呼び出した。

「オンドリ1よりオンドリ2、オンドリ3が潰された。周辺でおかしな『音』を拾ってないか？」

『「音」？』

「奴は地下を移動している。それも信じられない速度で穴を掘って移動しているらしい。だが、地下で動いていれば、そっちの『耳』に引っ掛かるはずだ」

『判った。すぐにこっちでも確認させ——』

「オンドリ2、どうした？」

『すまん。先手を打たれた。まあ、こっちの手口は奴にも筒抜けなんだから当然か』

「ヴー！」

『あんたをこの世界に引き込んだことについては、多少は反省している。多少だがね。だが、あんたと一緒に暴れ廻れたのは楽しかった。差し引きで言うと、俺としちゃあ悪くない判断だった。あんたとザンには悪かったが』

「駄目だ、ヴー！ 逃げる！」

ウォーキートーカー携行通信機のスピーカーから、自動小銃の連射音が洩れ聴こえる。『地獄に行っても、また楽しくやろうぜ！ じゃあな、ファン！』

「ヴー！」

ウォーキートーカー携行通信機が再び沈黙する。

ファンは険しい表情でウォーキートーカー携行通信機をしばし睨み付けた後、プレスブックボタン錆びついた機械を強引に動かすようなぎこちなさで送信ボタンを押して言った。

「……総員に到達。アポート作戦中止、アポート作戦中止。各自、現拠点を放棄して

事前に指定した集合拠点に移動せよ」

「諦めるのかよ！」

グエンの問いに、ファンは呻くように答える。

「至近距離に飛び込まれたら手が無い敵に対して、動きを捕捉するための『耳』を喪った。残りの歩兵が何人束になって掛かってても、相手にならん。部隊の戦闘としては、ここで手仕舞いだ」

「手仕舞いって、あんた……だけど、相手がこのまま見逃してくれるとは——」

「判ってる。判ってる、そんなことは！」

何かを吐きだすかのように叫ぶと、ファンは大きく深呼吸する。

「おい……？」

「そうだな。部隊としては手仕舞いでも、俺の喧嘩はまだ手仕舞いにするわけにはいかない。悪いが、あんたにも付き合ってもらうぜ」

ファンとグエンを乗せた軍用ヴィーグルは、崖の淵に引っ掛かった状態のジャイロ機を見下ろす斜面の上で停車した。

閃光弾の光は既に消えていたが、代わりに天頂まで上った満月に近い月が冴え冴えと辺りを照らし出している。

「来るかな？」

「来るさ」ファンは確信に満ちた口調で告げた。

「あいつは、そもそも俺に会いに来たんだ」

「……そうなのか？」

「そうさ。だから、最初からこうしておけばよかった。つまらん意地で、余計な犠牲を払い過ぎた……」

何を言っただやがる、とグエンは少しむっとした。

「あんた、前に、俺のことを、自分の意地で他人を犠牲にできない男だってバカにしたじゃないか」

「そうだったかな」

「そうだ。いざ自分の番が来たら、反省会かよ。バカにするにもほ

どがあるぜ」

「……そうだな。そうかしらんな」

ファンは苦笑した。

「そうさ。あんたの部下は、これがあんたの意地だと知ってここま
で付きあつてきたんだろう？　それがそいつらの意地だったんだろ
うさ。だったら、大将のあんたがその意地を最後まで突っ張らない
でどうするんだ」

「あんたも、つくづく——」呆れた口調で言いかけ、ファンは苦笑
して口をつぐんだ。

「いや、何でもない」

「何だ、おい。言いかけてやめるな」

「大したことじゃない。気にするな」

「いや、そんな言い方されたら、よけい気になるだろ」

抗議しようとするグエンを、ファンは手で制した。

「な……？」

「来たぞ」

月光を背に、ザンがゆらりと立ってこちらを見ていた。

「それじゃあ、打ち合わせ通りだ」

「奴をジャイロ機まで追い込む——それしか、決めてないような気
もするが」

「それで充分だろう——行け！」

ファンがグエンの肩を叩く。軍用ヴィーグルを急発進。ザンめが
けてまっすぐに突っ込む。後部荷台でファンが機銃を撃ち始めた。

ザンが銃撃を避けて、軍用ヴィーグルの前を横切ろうとする。

それを逃さじとグエンはステアリングを切った。

ザンの右手が不意に動いた。

「！？」

何かと思った瞬間、フロントグラスを突き破って、助手席に深々

とショートソードが突き刺さる。

「うわぁっ！」

「馬鹿！ 上だ！」

「へ……？」

見上げると、宙に浮かぶザンがこちらめがけて降りてこようとしている。ショートソードの柄から延びるワイヤーを伝って、こちらに来ようとしているらしい。

そのザンめがけて、ファンが機銃を撃ちかける。

落下の軌道を崩されたザンが斜面に叩きつけられ、転がってゆく。

「今だ！」

「おう！」

斜面を転がるザンを追って、ステアリングを切る。斜面を落下するのとあいまって、加速感に脳髄が痺れてゆく。恐怖を感じるべきなのに、発作的な笑みで口許が歪む。畜生。頭がどうかしてるぞ、今の俺は。

ザンが立ち上がるうとしている。

そこに頭から軍用ヴィーグルを突っ込ませる——激しい金属音。衝撃に車体フレームがたわむ。

「殺ったか？」

それを否定するかのように、フロントの陰から片腕が伸びると、ボンネットに指で穴を開けて無造作に掴む。顔を出そうとするとこるへ、ファンが自動小銃を撃ち込む。

「このままジャイロ機へ！」

「判ってる！」

ステアリングを大きく廻す。横Gに強く引っ張られながら、見慣れたジャイロ機を正面に据える。微かに胸が痛んだが、アクセルを踏み込む力は緩めなかった。

「突っ込め！」

「おおおおおっ！」

エンジン音を轟かせて、斜面をさらに加速する。ザンがフロント

から身を起こそうとしている。ジャイロ機はすぐ手前まで迫っている。もう少し、そこでじっとしている！

「飛び降りるぞ！」

「おうっ！」

ファンの声とともにグエンは軍用ヴィーグルから飛び降りた。

岩だらけの地面をごろごろと転がる。肩や背中のおちこちに小さな岩塊がぶつかり、世界中から蹴り廻されているような気分に陥る。やっとそれが終わったと思ったとき、重い金属の破碎音——軍用ヴィーグルがザンとともにジャイロ機に突入した音だ。

慌てて身を起こすと、まるでこちらの了解を待つかのように、伸ばした腕の先に起爆ボックスを掴むファンと目があった。

グエンが頷くと、ファンは起爆ボタンを深く押し込んだ。

爆轟とともに、ジャイロ機は業火に包まれた。

ファンがあらかじめ部下に仕掛けさせた爆薬が、機内の燃料タンクに引火する。帰還分を含んでまだ半分以上残っていた航空燃料に引火した炎は、引火と同時に燃料供給パイプを通して一気に機内全体に広がる。数千度の炎が、機体の隅から隅まで舐めまわす。いかなる生物であろうと、いかなる機械であろうと、この高温の灼熱地獄で生をまっとうするものなぞ、あるうはずもなかった。

「今度こそ、殺れたんだろうな」

グエンは肩で荒い息を継ぎながら訊ねた。燃え盛るジャイロ機からは少し距離があるのだが、照り返しの輻射熱だけでこちらにも火が付きそうだった。

「ウチの唯一の機体を新代わりにしたんだ、そうでなきゃ浮かばれない」

「大丈夫だ。さすがの奴もこの炎の中じゃ——」

ファンがそこまで言いかけた時、ジャイロ機の中心部で何かが弾け飛ぶような音がして、大きな金属片が宙高く跳ね飛んだ。

「!？」

驚いて見れば、炎に包まれたジャイロ機の中で、何か繭のようなものが揺れている。だが、周辺の大気自体が熱を帯びて揺らいでいて、よく判らない。

やがて眼が慣れたのか、何か両手を広げた人影のようなものが、そこに立っているのが判った。何かの粒子のようなものを両掌から発生させ、炎を防いでいるようだった。

「ま、まさか……………!？」

グエンは絶句した。

それでも駄目なのか？　ここまでやつても駄目なのか？

確かに、これは機神^{かみ}だ。人は畏れ敬^{おそ}うことしか許されない、ただ戯^{たわむ}れに殺されることしか許されない、荒ぶれる機神^{かみ}。無力な人間が寄りにもよって、そんな機神に挑みかかり、狩ろうなどと、思い上がりにもほどがあつたのだ。

絶望的な敗北感に打ちひしがれて膝を落とすグエンの横で、フアンはぼつりと呟いた。

「……………そうか。俺が行かなきゃ、駄目か」

「おい、あんた——？」

驚くグエンに、フアンはひどく穏やかな笑みを返した。

「社長さん、いろいろ捲き込み込んで、済まなかったな」

「おい、待て」

「借りを返す機会はもうなさそうなんで、詫びだけはここでしとく。いろいろ手伝ってもらって助かったよ」

「待てって言うてるだろう！　あんた、まさか——」

「あいつは俺に会いに来たんだよ」フアンは鉄力ブトの顎紐の緩みを直しながら言った。

「だから、行つてやらなきゃ」

「駄目だ！　目を覚ませ！　あれはただの化物だ！」

「違う」フアンは静かに首を振った。

「あいつは、俺の親友なんだ」

「……………」

言葉を失うほどに、朗らかな笑み。少年が自分の親友を誇らしげに紹介するような、そんな笑み。見る者に、そんな笑みで迎えらる親友を持たなかったことを、痛切に嫉妬させるほどの笑みで、ファンは笑った。

呆然とするグエンの前で、ファンは腰のホルスターから銃剣を抜くと、息を大きく吸って、腹から発する良く通る声で叫んだ。

「総員、着剣ーっ！」

銃剣を自動小銃の銃口の先にあるホルダーに着剣する。

「突撃用意ーっ！」

「やめろ、行くな！」

静止するグエンに、ファンは口許をにやりと歪ませて言った。

「じゃあな」

そしてもう一度、大きく深呼吸して叫ぶ。

「突撃ーっ！」
チャージ

「やめろー！」

絶叫するグエンを置いて、ファンは斜面を駆け下りてゆく。そこには一切の苦悩はなく、まるでまっしぐらに田舎のあぜ道を駆け抜ける少年のように晴れやかだった。

機内に飛び込む以前に、迷彩服に炎が引火して、すぐに全身に火が廻った。それでもその足は止まることなく、ザンの待つ繭へと飛び込んでゆく。

と、どこか遠くで小さな爆発音がした。同時に足下からは震動。それは一度で終わらず、すぐに唸るような地鳴りを伴い始めた。

あいつ、まさか――

ファンが爆薬を仕掛けたのは機内だけではなかったのだ。この一帯の地面に爆薬を仕掛けたのだろう。最初から、ここで決着をつけるつもりだったのか。

「あの野郎、少しはネタ晴らししていけよな！」

慌てて斜面を駆け上がり始めたが、既にジャイロ機のある崖の先

端辺りは崩壊を始めている。熱であちこちねじ曲がった機体が燃え盛りながらあつという間に闇の中に吸い込まれる。続けて、そこから地面が割れ、砕け、次々に崖の下へ崩落してゆく。

「畜生、こんなところで死んでたまるか！」

必死になつて登ろうとするが、勾配がきつい。こんなにきつかったか？ 疲労の所為か、あるいは足下が揺れているせいかな。足が思ったように前に進まない。

「うわっ！」

いきなり足下の地面が消失する。慌てて手近の岩塊を掴む。そこに全体重が集中し、両掌が悲鳴を上げる。ちらりと足元をみると、一片の光さえない闇が広がっていて、見ているだけで吸い込まれそうになる。その闇の底からは、落下していった崖の一部が下の地面に叩きつけられ、地の底からの叫びのような轟音を峠全体に響き渡らせる。

俺はこのまま死ぬのか？

グエンは肺の中の酸素をすべて絞り出す勢いで叫んだ。

「畜生——っ！」

だが、崖の崩壊はそこで終わった。

どれほどの時間、そうしていたのか。やがて、崩落も已んだと判断したグエンは、やっとの思いで崖の上に這い上がった。

「終わった、のか……」

呆然と周囲を眺める。そこには何もなかった。自分が操縦してきたジャイロ機も、ファンとともに自分が戦った痕跡も、あの驚異的なザンという化物がいたことも。

すべては崖下の闇の中に吞み込まれてしまった。月明かりに照らし出される、色彩のない空間の中で、風だけが轟々と音を立てて吹き渡っている。

何が現実で、何が幻であつたのか。

すべてが玲瓏^{れいろう}と輝くあの月の魔術であつたと言われれば信じてしま
いそんな感覚に、グエンは軽い眩暈を覚える。
そして、ただただ、いつまでも闇の中に立ち尽くしていた。

11（後書き）

崩壊する作戦。そして、ファンとザンの戦いは、最後の局面に——
戦闘は終息、だが物語はもう少し続きます。

次回はエピソード編その1。崖下へと向かうグエンのエピソード。
更新は来週11月20日（日）の予定です。
ではまた。

やがて、グエンは自分が選択をせねばならないことに気付いた。
このままファンの部下たちと合流し、一緒に峠から出るか。

あるいは、崖の下まで降りて、ファンとザンの屍体を確認するか。
考えるまでもなく、後者は自殺行為だった。この闇の中を崖下まで移動すること自体が危険だったし、あれだけの岩塊とともに落下したふたりを重機もなしに発見できるはずもない。何より、仮に何かを見つけることができたとして、グエンひとりでこの峠から抜け出ることなど不可能だ。……。

それだけ判っていて、グエンは後者を選んだ。

理由は自分でも判らない。ただあえて言えば、このままでは自分の中の何かの帳尻が合わない、と感じていた。それが合ったからと言って、どうなるというものでもない。命を賭けるに値するのか、と問われると首を傾げざる得ない。

それでも、グエンの足は崖下へと向かう道を探して歩き始めた。
頼りになるのは、手首に捲いた腕時計と、パイロットとして身に付けた航法術、それに手書きの荒っぽい作戦地図——最初に軍用ヴイーグルで周囲を偵察して廻った際に、ファンが小器用に描いてグエンに渡したものだ。……。

小一時間ほどして、下へと繋がる斜面を見つかる。決して勾配はゆるやかではない。崖ではない、というだけのものだが、贅沢は言えない。辺りを照らしていた月明かりは、山陰に隠れてしまっている。真つ暗な斜面をこわごとと降りてゆく。

ところどころ肘や脛をぶつけながら、少し降りては別のルートを探し、というのを繰り返す。

何かに身体を打ち付けたり、蹴躓いて転ぶたび、何で俺はこんなことをしてるのか、と自問する。答えはない。

せめて明日の朝、明るくなってからでは駄目だったのか。これも

答えはない。

だが、身体だけは別人格のように、前へ前へと進もうとする。
やがて根負けするように、グエンの意識は何も考えなくなった。
ただただ、崖下へ降りてゆくことに集中する。

そして何時間かの悪戦苦闘の末、崖下に辿り着くことができた。

二、三度ほど、ファンの名前を大声で呼んでみて、無意味だと思
ってやめた。

あの時、グエンはファンの身体が炎に包まれるのを見ているのだ。
仮にそれで生きていたとして、この高さから落下して無事なわけが
ない。

生きているとしたら、あの機神マシーナリィ・ゴッドの方だ。

「……………」

わざわざ命の危険を招きかねない愚を犯そうとしていたことに気
づき、口を閉ざす。

とはいえ、そうなることができることはあまりない。

足下を照らす明かりがあるでもなし、これ以上はいよいよ朝にな
らないとどうにもならないことを、さすがに認識し始めた。

それでも、ジャイロ機が落ちた辺りの近くまで、近づけるだけ近
づこうと、少しづつ周囲を探りながら進む。

腕時計を見れば、もうすぐ夜明けが近づこうとしている。冷え込
みがきつくなってきたているのは、その所為もあるのだろうか。防寒
機能もある飛行服でなければ、とくに体温を奪われて身動きが取
れなくなっていただろう。

やがて、目的の場所に到達した。

だが、崩れ落ちた岩塊が見上げるような小山をなしていた。

これは、夜が明けても、重機でもない限りどうにもなりそうもな
い。勿論、自分ひとりが生きて峠こゝから出られるのかも判らないのに、
重機を呼ぶなど夢のまた夢だ。

ここまでか……。

まだ何か納得しきったわけではなかったが、人生が納得できることばかりで構成されているわけではないことも、よく判っていた。

諦めてその場を立ち去ろうとしたそこへ、何かが小さく崩れる音がした。

見るともなしにそちらに目をやると、人の身体の一部のようなものが岩陰から見えた。

慌てて駆けつけたそこに、ふたりはいた。

岩壁にもたれて腰を下ろすザンは左腕を失くし、そこからケーブルや金属フレームの一部のようなものが顔をのぞかせていた。それ以外は、一見無傷なように見える。だが、ほとんど人間と同じ外観の一部から、機械が露出しているという背徳的な風景に、グエンは直視するのに抵抗を覚えた。

そして、その膝の上に横たわっている黒焦げの屍体はファンだろうか。落下の最中に失われたのか、これも手足の一部が欠けているように見受けられた。その屍体の頭に、ザンはそつと残った右手を置いている。

瞼を閉じて眠っているかのようなザンの様子を伺いながら、そつと近づこうとしたその時――

「来るな」

「!？」

生きている……？ 一瞬、身体が恐怖で硬直する。

「大丈夫だ。それ以上、近づかない限り、何もしない」

「……ファンは……？」

「眠っている」

ザンは瞼を閉じたまま、異議を認めない強さで断言した。言葉を失うグエンに、ザンは逆に問うた。

「ファンの、友達か？」

友達？ 軽い違和感を覚えたが、グエンは頷いた。

「そうだ」

「ありがとう」ザンは感情を込めた声で言った。

「ファンの友達になってくれて、ありがとう」

違和感が強くなる。何を言おうとしているんだ、こいつは？

「ファンは新しい友達を作っても、すぐに喧嘩しちゃうから、長続きしないんだ。いつも最後まで残ってるのは僕だけで――」

「あんた、何を言ってるんだ？」

ザンはグエンの問いを無視して、語り始めた。

「僕、やっと戻ってこれたよ、ファン。随分と時間が掛かっちゃったけど、こうして戻ってこれたんだよ、僕……」

12（後書き）

落下したファンとザンを追って。崖下へと向かうグエン。
今週はそのままエピソード2に続きます。

弾薬庫の爆発に巻き込まれたザンだったが、ファンに騙されたという意識は最後までなかった。ファンが自分に危害を加える、などという発想自体が初めからなかった。前の説得ではうまく理解してもらえなかったようだが、何度か説得を繰り返せば、いつかきつと理解してもらえると無邪気に信じていた。余人はともかく、幼い頃からいつも一緒に、幾度も死線を乗り越えてきた自分とファンとの絆は、簡単には失われることはない^{きずな}と信じていた。

だから、弾薬庫の爆発が始まった瞬間も、こうして二度目の話し合いに応じてくれたのだから、ふたりの関係が改善に向かって前進しているのだ、とさえ考えていた。

爆発で即死しなかったのは奇跡だった。たまたまザンの立っていた場所が、建物内部の火災と爆風の死角にあたっていたのだ。とは言え、即死を免れたというに過ぎない。周囲の火災の輻射熱は全身を炙って重度の火傷に追い込むのに充分だったし、火災によって一気に周囲の酸素が燃え尽くしたことにより、脳は酸素欠乏症に陥っていた。

ただし、弾薬庫の火災は比較的短時間で終息した。屋根を吹き飛ばして火柱が天へと突き上がった際、弾薬庫内の酸素も一緒に奪い去って鎮火に一役買ったのだ。

鎮火後、最初に現場に入ったのは、爆発物処理班である。憲兵隊は周辺を立ち入り禁止にただけで、現場には足を踏み入れていない。その爆発物処理班による不発弾処理の作業中に発見されたザンは、辛うじてまだ息があったため、基地内の病院に搬送された。

もつとも、この当時の>帝国<軍前線後方にある補給基地ごときに、重度の全身火傷に対する高度治療技術などない。担当医師が力ルテに「処置不能」と記載して、そのまま戦死扱いにされたことになった^{ロジスティックス}ている。この時期の北部戦線では、兵站への負担軽減のため、

兵士の遺体は現地埋葬されることになっていたから、遺族の下にも遺骨などは送られていない。

実際には、ザンは「引き取り部隊」に引き渡されて、以後、消息を絶つ。彼らが何者なのかは判らない。ただ、あらかじめ目星をつけた兵士や将校が重傷を負うなり死亡すると、それをこの正体不明の何者が回収して廻るシステムが各地の前線で機能していた節がある。

いずれにせよ、再びザンが目覚めたのは「施設」の中である。

「目が覚めたようね、ザン・セオ・キエム」

「……お姉さん、誰？」

白衣の女は軽く眉を顰めた。

「……そう。実装報告書にあった酸素欠乏症による脳損傷の影響ね。まあ、いいわ。実験には影響しないでしょう」

「……実験……？」

「気にしなくてもいいのよ。それより気分はどう？」

「ファンは、どこ？」

「ファン？ 人の名前かしら？」

「僕の、友達」

「そう、お友達なの」

「会う約束をしてんだ、ファンと」

ぼんやりと天井を見上げながら、ザンは呟いた。

「ごめんなさいね。当分、その子とは会えないわ」

「どうして？」

「あなたが病気だから」女はさらりと言ったのけた。

「あなたはここで病気の治療を受けるの。その治療が終わるまでは、ここを出ちゃダメなのよ」

「いやだ」

「大丈夫よ」女は優しく微笑んだ。

「いい子にしていれば、すぐに治療は終わるから。そうしたら、いつでもお友達に会いに行つていいのよ」

「本当！」

「本当よ。だから、いい子にしましょうね」女はそう言って、ザンの身体に毛布を掛けた。

「今日はもう疲れたでしょう。さあ、おやすみなさい」

「僕、眠くないよ」

「起動初日は脳への負荷が大きいの。マイクロマシンが脳神経に馴染むまで、無理をしちゃだめよ」

「……マイクロ、マシン……？」

「あなたに判らない言葉を使ってしまったわね。ごめんなさい」

女はザンの頭を優しく撫でながら、もう片方の手で白衣のポケットから小さな金属棒のようなものを取り出した。

「おやすみなさい、ザン」

女はにつこりと笑って、金属棒についているボタンのようなものを押した。次の瞬間、ザンの意識は途絶した。

「施設」で日々、ザンはさまざまな訓練ないし実験を「治療」と称して受けさせられた。嫌がると、「お友達と会えなくなるわよ」と脅されたので、やむなく女の言うこと聞いた。でも本当は嫌で嫌でたまらなかった。こんなこと、もうしたくないよ。

だから、ある日、女の指示を頑として無視してみた。何を言っても無視だ。僕はこう見えても、「強情なやつ」だってファンも言うてたくらいなんだ。

「しょうがない子ね」

女は溜息をつくと、白衣のポケットに手を入れた。

もしかすると、「ファンに会いに行ってもいいわよ」と言ってくれるのかと期待したが、違った。

女はあの金属棒を取り出し、前とは違うボタンを押した。

いきなり、強烈な激痛が頭を襲った。全身がばらばらになるような苦痛。悲鳴を上げてのた打ち回るザンに、女は深い憂いを込めた

表情で言った。

「私だってこんなこと、したくないのよ」

「だったら……やめて……！」

「でも、ザンがそんなわがママをいうなら、お仕置きをしなくちゃねえ、ザン。もうお姉さんを困らせるようなわがママを言わないで、約束してくれる？」

「……約束……する……だから……」

「そう。ありがとう」

女はにつこりと笑って、金属棒のボタンを押した。激痛が潮が引くように消えてゆく。

床の上で荒い息を吐きながら、まだ立ち上がれずにいるザンを見下ろして、女はもう一度、金属棒をこちらに向けた。

「じゃあ、今日はここまで」

ザンの意識は途絶した。

その日、女はファンに言った。

「敵が来たわ」

「『敵』……？」

カテドラル

「そう、大聖堂の執行部隊——いいえ、名前なんてどうでもいいわ。あなたと私の『敵』。あなたや私、『施設』の人たちを皆殺しにしようとしてきたの」

「こわい」

「そうね。でもザン、大丈夫。あなたの力だったら、きっとやっつけられるわ」

「やっつける……ころすの……？」

「そうね。結果的に、そうなることもあるかもね」

「いやだ。ころすのは、いやだ」

頭を抱えて首を振るザンに、女は呆れたように言った。

「……あなた、ここに来る前は優秀な兵士だったのよ。覚えている

でしょう。カバラス峠の戦いを」

「……カバラス、峠……？」

「そう。あなたは分隊指揮官として部下を指揮して、>同盟<軍に大打撃を与えた。大勢人も殺してるはずよ。」

あなたの脳障害は自我の幼児退行だけであって、記憶障害の症状は出てないんだから、思い出そうと思えば思い出せるはずよ」

ザンは瞼を閉じた。爆轟、銃声、怒号、断末魔の悲鳴、苦痛への呻き——いやだ。せんそうはいやだ。もう、せんそうはいやだ。

「……ファン、たすけてよ。ファンがいないと、僕、もうがんばれないよ……」

「また、ファン？ よっぱどお気に入りらしいけど、生憎とここにはいないのよ。」

……まあ、普段からの心理傾向調査で、こういう結果になるのは最初から判っていたけど」

女は白衣のポケットから金属棒を出した。それを見てザンがびくりと身体を硬直させる。

「大丈夫よ。今日は痛いことしないから」女は微笑んで言った。

「これから、あなたの中の『殺人』への抵抗感や禁忌感を解除します」

「……え……？」

女は薄っすらと口元を歪めた。

「心配ないわ。あなたは何の躊躇いもなく『殺せる』ようになるわ。やつらは所詮、虫けらだから。」

マシーナリイ・ゴッド

あなたは機神なのよ。神に手を出せると思いがった人間どもに、鉄槌を下しなさい。殲滅なさい。

マシーナリイ・ゴッド

生き残った者たちが、恐怖と畏怖の下で機神の名を口にして、語り伝えるように。それを伝え聞いた者すら、絶望に打ちひしがれるように」

女はゆっくりと金属棒をザンに向けた。

いやだよ。ころしたくないよ。ファン、たすけて。たすけて、フ

アン。……………。

ザンの意識は途絶した。

その日を境に、「施設」は移転した。

ザンが再び目を覚ました時、そこは初めて見る部屋だった。

「目を覚ましたのね、ザン」女は上機嫌だった。

「あなたのおかげで、『敵』は撃退されたわ」

「僕は……ひとをころしたの……？」

「ええ、いっぱいね」にこやかに女は言つてのける。

「ちゃんと記録も撮つてあるわ。観る？」

毛布を頭に被つたままザンは大きくかぶりを振つた。

「相変わらず臆病ね。まあ、その辺はおいおい『調整』していくからいいわ。」

それよりあなたにいい知らせがあるのよ」

「いい、知らせ……？」

「ええ。あなたのこの前の活躍が上層部うえに評価されて、実戦任務での使用が許可されたのよ。これで実績を積んでいけば、いずれは十神とくに選ばれることだつて夢じゃないわ！」

「>十神<……？」

「ああ、あなたにそれを話してもしょうがないわね。」

ともかく、素敵な話なのよ。あなたにとつても、私にとつても」

「だったら——」女の機嫌のいい今なら、あの頼みを訊いてくれるかもしれない。

「ファンと会わせてくれる？」

その名を口にした途端、女はいきなり不機嫌になった。

「また、その子の名前？ はいはい。その内にね」

「いやだ！ ちゃんと約束して！」

「聞き分けのない子は嫌いよ」

女は、不意に金属棒をザンの顔の前に出す。

反射的に硬直するザンに、女はにつこり笑って言った。

「おやすみなさい、ザン」

ザンの意識は途絶した。

女が部屋に入った時、辺りは血の海だった。

「状況は？」

「最初に殺されたのが定期調整の技師で、次に制圧のために送り込んだ警備要員がすべて——」

「バカね。>十神<候補の機神を人間如きでどうにかできるとでも思ったの？」

低い唸り声を洩らしながら、吐き捨てるように女が言う。

「でも任務終了時に『禁忌』モードに戻ってあつたはずよ。しかも、>組織<の人間を殺めるだなんて。コードが読み取れなかった？

まさか。そんな二重三重にミスが重なるなんて、いくらなんでも……」

その時、女の携帯端末が軽やかに鳴り響いた。

「誰？ 今は取り込み中よ」女は舌打ちして答えた。

「ああ、マダム。状況はこちらでも確認しています。そろそろ処刑人^{エクスキュー}の出番かなと思ひまして」

電子合成された男の声に、女の顔がどす黒く歪む。

「X^{ツインデ}つ！」憤怒の表情を隠そうとせず、女は言った。

「余計なお世話よ！ 私たちだけで解決できます！」

「実に頼もしい。ところで老婆心ながら、そちらの研究ブロックは封鎖してもらいました。これで貴女方のサルがそこから逃げる可能性はなくなつた。存分に力を振るっていただきたい」

「……X^{ツインデ}……あなた、まさか——！？」

「おっと、そこから先は邪推というものですよ、マダム。貴女らしくない。貴女にはもつとエレガントであつて欲しい」

「黙れ。必ず貴様の尻尾を掴んでやる！」

『ご自由に。楽しみにしています』

含み笑いを洩らしながら、回線が切れた。

女は携帯端末を床に叩きつけると、背後の警備要員に向き直って訊ねた。

「奴はこの奥にいるのね？」

「はい。しかし、先に突入した警備要員も、制御コードは持参していたはずで、既に機能していない可能性が――！」

「私を誰だと思ってるの？」女は金属棒を白衣から取り出した。

「あれを開発したのは、私よ。制御システムのソースの末尾まで、全部頭の中に入ってるわ」

言い捨てると、部下の制止も聞かずに部屋の奥へと進んでゆく。やがて、明かりを消した室内の奥で、ガタガタと膝を抱いて震えるザンを見つけた。

周囲には惨殺された警備要員たちの屍体が無造作に転がされてる。その臭気に顔を顰めかけ、ぐつとこらえる。

「ザン……ザン……。どうしたの？」

務めて優しい声で、女は声をザンに掛けた。

「……誰……？」

「お姉さんよ、忘れちゃった？」

ザンの緊張が解ける雰囲気。それをとっかかりに、さらに踏み込む。

「どうしちゃったのかな？ ザン、らしくないよね？」

「……ファンにあいにいきたい……」

またか。どれだけ調整を施しても、結局、ここへ戻ってくる。ここまで調整した筐体を放棄するのはもったいないが、新しい検体で仕切り直した方がいいかもしれない。どうせ、あのXツインテが今度の一件の責任問題を言い立てるに違いないのだ。

「ねえ、前にお姉さんと約束したよね。お姉さんを困らせること、言わないって」

「いやだ！」ザンは大きく首を左右に振った。

「ファンにあいにいく！ でないと僕はだめになっちゃう。どんな、だめになつて、こわれてゆく。もういやだ！ ファンにあわせてよ！」

ザンが急に立ち上がった。

駄目だわ。興奮している。これはいったん、機能停止させて——白衣のポケットの中で金属棒に触れた女は、機能停止ボタンを強く押し込んだ。

反応なし。ザンはそのまま歩いて部屋を出て行くとする。

女の顔色は蒼白になった。

制御コードが効かない！？ 馬鹿な！ 自分が持っているのは、警備要員なんかにしたせたと違う、スーパー・アドミニストレーター最上級管理者権限の制御コードのはず。

受信ユニットが故障？ いいえ、正副予備の三系統が同時にダウンだなんて有りえない。

制御コードを誰かが書き換えた？ もっと、ありえない。私のシステムに入りこめる者など、研究所にはいない。

研究所以外では？ 組織の最上級機関＞十神ツインテくの「神々」ならば、それぞれ最高レベルのアクセス権限を——X！？ あの女！？

怒りが抑えきれなくなる。あの女は、一体何の権利があつて、こんな真似を——エクスキューシユナー処刑人。本当の標的は、まさか……。

今度は恐怖が女の全身を襲う。

自分を狙つてるのか？ 狙われてるのは自分なのか？ >組織<は自分を不要と判断したのか？

駄目だ。駄目だ。駄目だ。……。

いや、落ち着け。落ち着くのよ。

まだそうと決まつたわけじゃない。公式の処分なら正式な通知が先に下るはず。リストラそれもないでこんな謀略を仕掛けてきたのなら、公式に処分する理由がない、ということだ。ならば、この事件を自力で解決すれば、まだ生き延びるチャンスはあるはず。そこに賭けるしかない。

どちらにせよ、このままザンを外に出すわけにはいかない。

足下に警備要員が所持していた自動拳銃が転がっていた。

それを手に取り、ザンの背中に向ける。

「止まりなさい、ザン！ 止まらなければ、撃——」

そこまで言いかけ、不意に違和感。何か取り返しのつかないミス
を犯してしまったような焦燥。……

ザンがゆっくりとこちらを振り向く。

「……ぶき……にんげん……せんめつ……」

「あ、待ちなさい。違うの。これはそうじゃないのよ！」

慌てて銃を捨てる。だが、既に何もかも遅かったことに気付いた。
殲滅戦モードが起動している。武器を持つ人間は、すべて殺戮対
象とするモード。例外は、保護コード対象者のみ。>組織くの間人
勿論、自分は最優先保護対象者として指定してある。それ以外の例
外はない。例外はない。

だが、その保護コードが書き換えられていたら？ 警護要員も保
護対象者だったはずだ。なのに殺された。ならば、自分も……？

「やめて、ザン。あたしよ、忘れちゃったの？ ねえ、ザン。お願い！」

白衣のポケットを探る。金属棒。効かないと判っているそれを、
ザンの前に突き付け、機能停止ボタンを強く押し込む。何度でも。
何度でも。

「いやよ。何で効かないのよ、このポンコツ！」女は金属棒を床に
打ち捨てた。

「そう。会わせてあげるわ、ファンに。会いたかったんでしょ、
ずっと。ねえ、だから、やだ。殺さないで。死にたくない。死にた
くない。死にたくないの。いやよう、こんな死に方、あたしもつと

——

ザンはショートソードを振り下ろした。

「施設」を抜け出したザンは、自分がどこにいるのかも知らなかった。

だが、何かに導かれるように、東へ、東へ、と向かった。砂漠を越え。山脈を越える。

ひとりで歩き続けた。寂しかった。だが、ファンに会えると思うと、胸が高鳴った。勇気が出て、もっと頑張つて歩こうという気になった。一歩づつ、一歩づつ。この道はきつとファンのいる場所に続いているんだ。

やがて大きな街に出喰わした——ドゥックルン。人がいっぱいいた。建物が込み合つて、空が狭かった。ごみごみしたこの街を、ザンは好きにはなれなかった。

だけど、この街なら、ファンのことを知っている人がいるかもしれない。

道行く人に訊ねてみる。せかせかと歩くこの街の人はあまりザンの相手をしてくれない。面と向かつて断られると、とても胸が苦しくなる。

それでも勇気を出して訊いて廻る内に、ファンの勤め先を見付けることができた。

職場のファンは、常に目つきの鋭い強面の男たちに囲まれていた。何度か声をかけようとしたが、怯^{こわ}くて遂に声を掛けそびれた。

そんなことを何日か繰り返して、その日もとぼとぼと寢床にしている公園に戻ろうとしたら、道路を走り去る車列の中にファンの姿を見かけた。嬉しくなつて追いかけたら、街の中心街にある背の高いホテルに入つていった。

どうしようかとしばらく迷ったが、意を決してホテルに足を踏み込んだ。

「失礼ですが、お客様。何か御用でしょうか？」

警備要員らしき強面の男が訊ねる。ザンは困惑して男の姿を見る。左脇が不自然に膨らんでいる。拳銃で武装——殺戮戦モード起動。

ザンはショートソードを抜き放つと、男の胸を予備動作抜きで貫

いた。次いでフロア内を検索。武装した人間が一名――殲滅戦を開始。……………。
すべては自動的に行われ、終了した。

13（後書き）

弾薬庫の爆発後、ザンの身に何が起こったのか――

エピソード編その2です。

で、女科学者のエピソードがいきなり入ってきてますけど、本編の特にこれ以上フォローすることなく今回は終わりです。まあ、他のエピソードの中でいずれ言及されるかもしれませんが。

こんな感じで、多様な人々のそれぞれの「物語」が、ちよつとづつオーバーラップしていずれ「大きな物語」が浮かび上がるような構成で、このシリーズは書いていければなと思っています。

次回はエピソード編その3&4。ラスト2話一挙掲載で連載終了となります。

更新は来週11月27日（日）の予定です。

では、また。

「……ちよつと待て。それじゃあ、あんた、ただファンに会いたかっただけで……そのために、こんな——」

グエンは愕然とした。どう捉えればいいのか判らなかった。ついさっきまで命賭けで凄惨な殺し合いをしてきた相手の中身が、子供のような精神を持った殺人機械だった——ならば、罪に問うべきなのは、子供の無邪気さなのか。それとも殺人機械であるべきか。あるいはそれを造った者こそ、その罪を責められるべきなのか。

だが、ザンの話が事実なら、ザンを造った女は既にザンの手に掛かって死んでいることになる。

何なんだ。何だったんだ、この戦いは……？

自分の足元がぐらぐらと揺れているようで、立ってられない。思わず片膝をついた。

いや、駄目だ。ファンは受け入れられなかったらう。自ら手に掛けた親友が目の前に戻ってきたとして、はい、そうですか、と受け入れられるはずがない。

だとしたら、結局、同じプロセスを踏むしかなかったのか？　こういう形で、お前たちは「再会」するしかなかったのか？

このふたりは、どこで道を間違ったのだらう。どこからやり直せば、こんな悲劇に陥らずに済んだのだらう。

カバラス峠——ここでの戦いの日々が、そうだったというのか？　ここから、もう一度やり直そうとしたのか……？

だがそれは、結局、他人である自分が考えて始まるものでもない。その単純で、厳然たる現実の前に、ただ呆然と立ち尽くすしかないのだ。

「……もう、いいかな？」

「え……？」

「僕の身体は、もうすぐ機能を停止する。警告が出てるんだ。生命

維持に必要な機能のいくつかが壊れて、修復不能らしい。たぶん、もって数時間くらいだろう」

「……………」

「だから、ファンとふたりだけにして欲しい。ファンとはずっと話さなくちゃいけないことがあって、ずっと話をしたかったんだ。話し合えば、また前みたいに仲良くなれるって、ずっと思ってたからずっと——」

「……そうか……」

そうとしか、言えなかった。

「じゃあ……さよなら」

「さよなら」

ザンは穏やかに微笑んで言った。

グエンはやり場のない思いを抱いたまま、背を向けて歩き出そうとした。

が――

獣が絶命するような、野太い悲鳴が背後から聴こえてくる。

慌てて振り向いたそこには、真っ黒なプロテクター付きのライダースーツに、同じく真っ黒なフルフェイスのヘルメット、といった全身黒尽くめの男が、ザンの肩を足蹴にして、その胸を長槍ジャベリンで貫いていた。

「な……何やってんだ、あんた！」

『何？ 見て判んねえかな。故障した機材を回収に来てるんだよ』

電子合成された男の声――いや、あるいは女なのかも知れない、と一瞬思った。電子合成の声と男言葉で誤魔化されてはいるが、何となく、イントネーションが女のものに近かったのだ。

「男」が、絶命したザンの身体から長槍ジャベリンの穂先を引き抜いた。

その姿に、グエンは言い知れぬ怒りを覚えた。

「そいつは、もうすぐ死ぬところだったんだ！ それまでの数時間

を、親友と過ごしたいって、そう言って――」

『それを待てと？ アホかお前』呆れたように男は言った。

『こいつがもうすぐ死ぬなんてのは、テレメトリーのログ見て判つてんだよ、こっちは。それまで呑気に回収待つてたら夜が明けちまうだろうが。そうすると面倒事が増えるんだよ。だからさっさと終わらせに出張^{ては}つてきたのに決まってんだだろうが』

「な……………！」

屍者への尊敬も敬意も感じられない物言いに、グエンは絶句した。

『ああ、そうそう。全然、他人事じゃないから、あんたも』

「え……………？」

次の瞬間、男は左腰のホルスターから短機関銃^{S M G}を抜いて、無造作にグエンに向かって発砲した。

「が……………！！」

着弾の衝撃で吹っ飛ばされたグエンが、呻き声を上げる。

『おや？ 急所は外したか。そういや、空軍のパイロットスーツは防弾機能付きだったけ』

それでも手足に何発か貫通し、激しく血が噴き出している。

苦痛にのた打ち廻るグエンの元までやってくると、男はその頭部に銃口を突き付けた。

『悪く思ふなよ。こいつと関わった人間は、全部片付けなくちゃならなくてな。そうそう、上でうるちよろしてた兵隊さんは先に始末しておいたから。その黒焦げの隊長さんを必死で探してたんで、あの世まで案内してやったってわけさ』

「あんたら、いったい何者だ……………！」

『それ答えると思う？ これから死んでゆく人間に』

「ふざけるな……………！」

グエンは憤怒の形相で男を睨みつけた。

『おっと、面白い目をするじゃないか』

「面白い目、だと……………？」

『そうさ』男は喉をくくつと鳴らして言った。

『こいつは元々、ウチの>組織<の資産だから、逃げ出しました、はいそうですか、で片付けるわけにはいかんわけさ。特に接触されては困る筋もあってね。それでずっと監視下に置いていた。まあ、ヤクザと揉め事起こす分にはどうでも良かったので、ドウツクルンでは放っておいたがね。』

それが何を考えてるんだか、こんな山奥に引っ込んでドンパチやらかし始めたので、終わった頃に機材回収にやってきた、ってわけさ。

だが、ずっと見てきたが、こいつらは本当にどうしようもない連中だったよ。特に目を見れば判る。どいつもこいつも、死にたがりの目をしてやがった』

「死に、たがり……？」

『そうだ。この世に絶望している。今自分が生きている世界に苦しみだけを与えられているかのように感じている。救いのない閉塞した世界と感じている——その癖、自分で自分の頭を鉛玉でぶち抜く度胸もない。誰かが上等な理由を付けて殺してくれるのを願ってる。何か自分の死が価値のあるものにしてくれるのを願ってる。』

男どもはみんなそうだ——アホかつつの！』

男は吐き捨てるように言った。

『自分の命の価値は自分で決めるんだよ。自分の死の価値も、自分で決める。それもできない甘ったれの死に尊厳？ 敬意？ 笑わせな。死ぬことで何かから解放されるなんて夢見てた馬鹿野郎どもには、こんな辺鄙な山の中で、誰にも知られずのたれ死ぬのがお似合いだ！』

「違う！」

グエンは叫んだ。

「俺が、覚えてる。こいつらがどれだけ必死で生きてきて、死んでいったか。何を大切にして、何を守ろうとしてきたか。不器用で、人生うまくいなくて、それでも必死で足掻いて生きてきたか、俺が覚えていてやる！ 俺がこいつらの生も、死も肯定してやる！」

お前みたいな奴に、こいつらの人生を否定なんかさせない！」

『ふうん……』グエンの必死の叫びに、男は軽く鼻を鳴らす。

『なるほどね。だが、そういうお前もこれから死ぬんだぜ』

銃口をグエンの強く押し付ける。

「畜生！ 畜生！ 畜生！」

銃口を突き付けられたまま、グエンは男のフルフェイスのヘルメットの向こうを睨みつけた。

『なるほど。あいつらと違って、生きる理由があるやつってのは、こつという目をするのか……』

「……………」

『やめだ』男は銃口を外した。

『ここで殺すのはやめてやる。ただし、怪我の手当ても何もなしだ。食料も水もなし。そのコンディションで、この峠を抜けてみる。あんたの生きたいという意志がそれほどのものなら、残りの人生は好きにしる』

「……………いいのか、それで……………」

訊ねるグエンに、男はもう一度、短機関銃の銃口を向ける。^{SMG}

『おっと、気が変わって、やっぱり殺しとくかって気になるかもしれないぜ——冗談だよ』

男は短機関銃をホルスターに収めると、首の喉頭マイクのスイッチを押す。^{スロット・マイク}

『作戦完了だ。回収しろ』

周囲がいきなり明るくなる。どこからの照明だ？——上？

吊られて上空に目をやると、いつの間にそこにきていたのか、巨大な飛行物体がライトで地上を照らしている。ジャイロ機？ だが、ローターの旋回音も下方気流も感じられない。何なんだ、この機体は。^{ダウン・フォース}

そこから男と同じような黒尽くめの兵士たちが、棒状のステップに乗って降りてきた。兵士たちは、すみやかにザンの屍体を回収すると、また上空の機体へ吸い込まれるように消えてゆく。

『じゃあな』

男は自分用のステップに足を掛けると、そう言い残して上昇してゆく。

やがて不意に明かりが消えた。

大気の流れも何もなく、しばらくしてグエンは上空の機体が既に去ったことに気付いた。

14（後書き）

そして、すべては終局へ――

ツインテデウス・エクス・マキナ

『棺のクロエ1』で出てきたXが「終劇の神」として登場します。

いや、あのまま終わらすのも、きれいな事に過ぎるかなあ、と。

単に「男たちの熱いドラマ」で終わらせるのも虫がいい気がして、冷水浴びせにXを引ッ張り出してきたというか。

次の最終章と併せて、自分の作家としてのバランス感覚の落としどころは、まあ、こんな感じですよ。

で、後、ちょっとだけ続きます。

引き続き、最終章をお楽しみください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8698w/>

棺のクロエ1.3 機神狩り

2011年11月26日20時52分発行